

紀
要

成安造形大学附属近江学研究所

第
12
号
—
2
0
2
2

JOURNAL OF OMI MULTICULTURAL INSTITUTE OF
SEIAN UNIVERSITY OF ART AND DESIGN NO.12 — 2022

目次

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の研究 ―伝来についての推測―	高梨 純次 公益財団法人秀明文化財団理事 (MHO MUSEUM 研究・展示担当)／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員	3
雄琴の土豪和田氏の出自について	和田 光生 大津市文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員	11
近江における地藏盆 ―最小単位的地縁コミュニティ―	加藤 賢治 成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長	21
近江の懷をめぐる 6	石川 亮 美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員	35

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の研究

―伝来についての推測―

公益財団法人秀明文化財団理事 (MIHO MUSEUM 研究・展示担当) / 成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

高梨

純次

滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の研究
―伝来についての推測―

公益財団法人秀明文化財団理事 (MIHO MUSEUM 研究・展示担当) / 成安造形大学附属近江学研究所客員研究員 高梨 純次

Name:

TAKANASHI Junji

Title:

An Inquiry into the Wooden Fudō Myō-ō Nidōji Statues of Jōshōan Temple in Aishō-chō, Echi-gun, Shiga Prefecture: Part III of the Study

Summary:

Continuing from the two previous studies, I examined the wooden statue triad of Fudō Myō-ō and two children in the collection of Jōshōan Temple, and focus on the circumstances surrounding its initial construction. Jōshōan Temple was built in the 17th century, and this set of statues, which was created between the end of the 12th century and the beginning of the 13th century, was transferred there from another location. The form and style of this triad suggest it was made by the Kei school and it is similar to the works of Unkei or Kaike. Records show notable artistic activities of the Kei school in the vicinity, including approximately three statues of Fudō Myō-ō in the former Binman-ji Temple in Taga-cho, which today retains the name Binman-ji as a place name. It is speculated that this statue triad was moved from Binman-ji Temple, which fell to ruin at the end of the 16th century, to Jōshōan Temple.

はじめに

この拙稿は、滋賀県愛知郡愛荘町の金剛輪寺の子院として建つ常照庵に伝えられた、木造不動明王二童子像^{〔註1〕}についてこの『成安造形大学附属近江学研究』紀要^{〔註2〕}に掲載していただいた二編^{〔註3〕}を引継ぐものである。最初の論考は、この木造不動明王二童子像の調査結果について報告し、二編目では像についての作風などを比較検討し、中尊像と両脇侍像には厳密な意味での一具性に乏しいとした。造像時期について、中尊像は十二世紀末から十三世紀初頭と考えた。両脇侍像も、その姿勢や視線から想定する配置などからしても、半跏像になる制吒迦童子像については一二二〇年代後半から二二〇年代あたり、保守的な趣のある矜羯羅童子像は十二世紀末から十三世紀初頭と想定した。中尊像と矜羯羅童子像については、製作時期の近さはもとより、顔の輪郭や体の分節表現、衣文の彫り口やアールの連なりなどに親しさがみられるが、一具とするには、なお検討の余地がある。ここでは、基本的に三軀のうち全てに、一具性はないと判断した。

この三軀の表現は、極めて完成度の高いものであり、特に中尊像の表現について、動的な巻髪^{〔註4〕}の表現などは、運慶の手になる伊豆・願成就院の木造不動明王像に親しさがあり、その彩色文様についても高野山・木造八大童子像のうち恵光童子像に倣うような性格がみてとれる。中尊像の作者は、基本的に慶派の手慣れた仏師の工房としてよい。両脇侍像についても、作風や特に彩色文様の仕様などからして、基本的に慶派の工房を想定した。

さて、この三尊像が伝えられ安置されている、金剛輪寺山内の常照庵は、創建が江戸時代に下がることとが確実であり、造像時期との間に大きな開きがある。前回でも触れたように、ここには半丈六の大きさになる本格的な木造阿弥陀如来坐像も伝えられている。ここでは、近世における創建時の事情なども考慮しながら、この三尊像の造像時の状況について考えてゆきたい。

一、常照庵の創建

常照庵については、彦根藩家老の木俣清左衛門守安の室で法名常照院の創立とされ、『近江愛智郡志』第五卷に史料も掲載されており、詳しい^{〔註5〕}。元禄九年（一六九六）仲秋の縁起書に、「木俣守安のぬしの、北の御かた、常照院殿の草創し給ふところなり」としている^{〔註6〕}。創建の年次については、承応三年（一六五四）二月十五日付木俣清左衛門守安に

よる「常照院掟之事」写があり^{〔註5〕}、この頃には存在していたとみられる。

木俣清左衛門守安は、天正十四年（一五八六）に生まれ、徳川家康から井伊直政に配属された木俣守勝の養子となり、慶長十五年（一六一〇）に守勝が没してのち、その家督を継いだ。守勝他界後の井伊家仕置に、若年故に守安が外されたことについて、井伊直孝は不満を漏らしていたとされており、その手腕が期待されていた。やがて大坂の陣後には、加増され、筆頭家老として元和偃武以降の彦根藩の安定・発展に尽くしている。木俣家はその後、家中最高の石高、一万石に至る^{〔註6〕}。守安は寛文十三年（一六七三）に没したとされるから、まことに長命であった。その内儀については、承応二年（一六五三）九月二五日付の、木俣守安による「逆修石塔之事」に、「大心院殿応誉源鑑居士（俗名木俣清左衛門尉守安）／常照院殿光誉芳心大姉（守安内女／畠山入菴息女）」（内割書）とある。同日付の木俣清左衛門内儀による「月はい并いはいの事」に「寛永廿年癸未八月十三日」興松院殿入菴宗破居士（ウラニ／施主守安内儀／如此　らせ可有之候）／（寛永廿一年甲申四月十三日）性徳院殿妙安大姉（ウラニ／右同断）／右二本ニハ入御念可被下候」（内割書）^{〔註7〕}にある、興松院殿入菴宗破居士と性徳院殿妙安大姉は内儀常照院の父母と思われる。

これらの史料からして、常照庵は承応二年（一六五三）には創建されていたことになるが、おそらくこの頃に建立された可能性が高い。既述しているよ

うに、常照庵にはこの不動明王二童子像とともに、半丈六の木造阿弥陀如来坐像も祀られているが、阿弥陀如来坐像も十三世紀前期あたりの造像とみられ、ともに重要文化財に指定されている。とすれば、これらの古像は、常照庵創建のために造像されたものではなく、どこかの寺院やあるいは廃寺などに伝えられていたものを移座したということになる。では、以前の安置場所について推測できる手がかりはないのだろうか。

二、常照庵

木造阿弥陀如来坐像からの推測――

本像とともに安置されている、木造阿弥陀如来坐像^{〔註8〕}について一瞥しておきたい（写真4）。

像は、来迎印を結ぶ半丈六の堂々とした阿弥陀如来坐像だが、その構造について特徴がある。それは、頭体幹部を一材製として前後に割って内割りする割矧ぎ造りになるが、左体側の大半も共木として肩で左右に割って内割りをしている（写真5）。同様の仕様になるのは、在銘の金剛輪寺木造阿弥陀如来坐像（木造・漆箔、像高一四一・二センチ）であろう^{〔註9〕}。金剛輪寺像は、貞応元年（一二二二）から嘉祿二年（一二二六）の年記があり、この時期に造像されたと推測される。仏師は近江講師経円で、この仏師は同じ貞応元年に、近在の仏心寺・木造聖観音立像を造像している^{〔註10〕}。その前後関係からいうと、九月十四日に着手して仏心寺像を完成した後、

十月から金剛輪寺像に着手したとみられる。常照庵像と金剛輪寺像は、その体の構えをはじめ、着衣形式などは極めて近いが、反面、髪際のうねりや表情、衣の畳み方の複雑さ、衣文の彫刻などは金剛輪寺像に新しい工夫が認められる。とすれば、このような半丈六像であれば、通例として一ヶ月から二ヶ月で完成できるとみられるが、金剛輪寺像が四年弱の日数を要しているについて、何らかの事情があったと推測される。その割矧ぎ造りの仕様から、常照庵像は、この四年の間に経円が造像した可能性が求められるが、これについて即断はできない。というのも、近年の調査の成果として、同じような仕様の像が確認されている。一つは、近江八幡市西願寺の木造阿弥陀如来坐像（木造・漆箔、像高六九・七センチ）で、像内に文治四年（一一八八）の墨書がある^{〔註11〕}。これに近い大きさの、甲賀市・飯道寺木造阿弥陀如来坐像（木造・漆箔、像高六八・七センチ）は、作風からして十一世紀末から十二世紀初頭の作とやや古いが、これも同様の割矧ぎ造りになるとみられる。

管見に及ぶ作例はこの四軀だが、後二者のようなサイズの像であれば十分に合理的な仕様であり、将来的には確認される事例が増えることになると思うが、現状において検討するならば、常照庵像と金剛輪寺像は基本的に近い工房の手になるものとしてよからう。両者の差異についての厳密な分析は今後の課題であろうが、仏心寺木造聖観音菩薩像の銘記に「今当郡住」と書く近江講師経円の工房とすれば、この近在での造像であろう。仏心寺も金剛輪寺の近

在で、直線距離にすれば北西方向約二キロ以内位置している。金剛輪寺山内の在銘像は、一二一〇年代から二〇年代に一つのピークがあり、仏心寺像もそのうちに含まれる。常照庵像も、それに近い時期に近い場所で造像されて安置されたと推測される。常照庵の創建時、木俣守安とその内儀は、金剛輪寺山内に伝えられていた像をもって、その本尊として安置したものと推測される。

三、不動明王及び

両脇侍像の所在についての推察

阿弥陀如来坐像と同様に、不動明王と両脇侍像は、どこから移座されたか、造像時当初の所在について検討してゆきたい。本像についてみると、像は十二世紀末から十三世紀初頭に三軀が建立され、作風や表面の彩色・文様の仕様からして、慶派の工房による造像とみられる。さらに、厳密な意味で三軀の間の一具性は検討の余地があり、少なくとも主尊と制吒迦童子像は別のグループとみられる。つまり少なくとも二組の不動明王と脇侍像があったということであるが、それが金剛輪寺山内に伝えられていたとは思えない。前記したように、金剛輪寺本堂には十二世紀も半ばあたり以降からの諸像が祀られているが、この種、慶派の手になる像は全く確認されていない。そのような中、少なくとも二組以上の慶派の手になる不動明王と脇侍像が祀られていたとは思えないのである。では、どの辺りに伝えられてい

たのかを考えてみたい。

これを考えるための材料として、木俣家とこの地域との関係性について一瞥しておきたい。木俣家の知行については、慶長期（二五九六年―一六二五年）には四千石、大坂の陣後には合わせて一千石が増され、寛文十二年（一六七二）の知行は七千石にのぼっている。その知行地については、詳細な書類が残されており、その数は伊香・浅井・坂田・犬上・神崎・愛知・蒲生の七郡、三六カ村に及んでいる^{〔註12〕}。この知行地の年貢徴収、土地管理、その他の業務を担っていたのは、十七世紀後半には坂田郡新庄寺村の代官であった村崎家であったとされ、この時期にはその土地の有力者との繋がりもあったとみられる。

このような土地、特に金剛輪寺近辺で、十二世紀末頃に慶派が造像していたとみられるのは、多賀町に地名を残す、中世を通じて多くの堂塔が立ち並んでいた敏満寺に思いが至る。

敏満寺については、この地が奈良時代の莊園絵図が残されている、東大寺領水沼庄の故地であり、その方面からの研究がなされ^{〔註13〕}、また近江猿楽の有力な座として世阿弥の『申楽談儀』に登場する「みまじ」座の所在地として注目されてきた。その後、平成七年（一九九五）に敏満寺区の史跡文化保存会より、石仏などが大量に分布している場所があるとの報告があり、翌年より多賀町教育委員会が予備調査を行い、類い稀な規模の中世墓地であることを確認した。以降、測量や発掘調査が行われ、大部の報

告書が刊行されている^{〔註14〕}。敏満寺についての詳細は、この報告書を参照していただくとして、ここでは触れない。なお、敏満寺に関わる文化財については、この地に鎮座する胡宮神社に伝えられ、重要文化財に指定される銅製五輪塔は建久九年（一一九八）に重源によって寄進されたものとして有名である。尊像については、十二世紀から十三世紀にかけての仏像や神像の存在が知られていた^{〔註15〕}。そこには、明らかに慶派の工房による作例が認められ、敏満寺の復興、というより中世寺院としての発展の礎が重源の介在によって進展し、造像事業についても慶派の介在が明らかとなった^{〔註16〕}。特に、銅造大日如来坐像は、像の大小は異なるものの、建久五年（一一九四）頃の作となる石山寺多宝塔主尊の木造大日如来坐像や建仁元年（一一〇二）在銘の伊豆山常行堂旧蔵木造宝冠阿弥陀如来坐像など、快慶の手になる像と極めて近い。また、圈内では極めて早い時期の玉眼嵌入像である木造地藏菩薩半跏像など、新しい技法や作風になる慶派の像なども伝えられており、本像との関係を伺うについても極めて興味深い。

敏満寺の寺観については、後世のものながら「注進 当寺堂塔鎮守目録所」が記録されている^{〔註17〕}。そこには「本堂七間（本尊大日／並観自在尊）（内割書）から始まって、三重塔・如法堂・観音堂など二十字を中心として、南谷に十二字、西谷に十四字、尾上谷に十字が記録されている。敏満寺が建っていた、胡宮神社の神体山とされる青龍山の北から西麓にかけて、胡宮・南谷・北谷・風呂谷・西谷な

どが小字として残されている。また発掘成果などからして、現在の名神高速道路多賀SAの東西、特に東側に主要な寺院の集合がなされていたと考えられている^{〔註18〕}。この目録によると、中心伽藍には五大尊堂があり、南谷の西福院には「本尊阿弥陀三尊／并不動毘沙門」、西谷の光明寺に「本尊不動弥陀」と、主要尊としても不動明王を安置したとみられる記載が複数にのぼっている。石仏谷の墓跡の様相からしても、鎌倉時代から室町時代には極めて有力な寺院として繁栄していたとみられるが、十六世紀あたりより衰亡に向かい、やがて織田信長の攻撃によって焼亡したとされている^{〔註19〕}。発掘の成果からも、十六世紀後半あたりに、防御施設を備えた城郭化が進み、その後焼亡したとされている。近世の太平の世になると、「多賀胡宮福寿院」^{〔註20〕}がその跡を担うこととなり、残された堂舎の維持管理や残された尊像の安置礼拝を行うが、時として尊像が盗難にあうなどの没落ぶりであった^{〔註21〕}。

十七世紀に至って復興されたとはいえ、その様相は昔日の繁栄に遠く及ぶものではなかった。まことに唐突な推量にて恐縮ながら、このような寺勢の様態からして、木俣守安の内儀による寺院建立に際して、これら敏満寺に伝えられた慶派の作になる不動明王像と脇侍像は、常照庵に移座されたのではないかと思われる。木俣家の所領として、敏満寺の地が直接に入っているわけではないが、犬上郡尼子村は敏満寺の西に近接し、大尼子村は北に接している。特に後者、大尼子郷については、元徳元年（一三二

九）より、地頭代盛による敏満寺への押妨が記録されており^{〔註22〕}、寺勢が盛んな時代においては、寺領の一部となっていたとみられる。このような散在する木俣家所領の周辺で、慶派の手になる不動明王と二童子像が、複数存在していた場所を求めるならば、敏満寺は恰好の中世寺院であり、その退転を想像するに、常照庵の創建に際して、優れた尊像が新しい信仰の場に移され、そこで再生されたのではないかと想像されるのである。

結びにかえて

拙稿は、三稿に及んで、鎌倉初期の慶派による優作である常照庵の木造不動明王二童子像について述べてきた。敏満寺については、既にいくつかの駄文を発表しているが、近江の中世彫刻を考えるに際して、見逃せない重要な寺院であり、様々な視点よりの研究が求められていると思う。近江国の質・量ともに豊かな尊像は、近世の太平の世の到来とともに、戦国乱世によって壊滅の危機に瀕した杜寺の復興・再編とともに、大きな変動を経験したのではないかと推測している。常照庵と敏満寺を、単純に結びつけるについては、色々とお叱りを受けることと思うが、彫刻史研究の今後の課題として、近世社会における尊像の伝承について意を用いる必要性を感じた故に推量を及ぼしてみた。先学・識者のご叱正をお願いしたい。

【追記】

この稿をなすについては、常照庵・金剛輪寺住職濱中大樹師、ともに調査を行った和澄浩介（滋賀県立琵琶湖文化館）、三井義勝（愛荘町立歴史文化博物館）、桑原康郎、一村武司、辻上祐貴（以上MIHO MUSEUM）の各氏より、ご高配を賜った。一部の史料については、彦根城博物館渡辺恒一氏のご教示をいただいた。

不動明王二童子像の写真については小池澄男氏（MIHO MUSEUM）撮影のものを、木造阿弥陀如来坐像については故寿福滋氏撮影の写真を掲載した。

註

1. 木造不動明王像は木造・彩色・玉眼、像高一〇八・五センチ。制吒迦童子像は木造・彩色・玉眼、像高三六・七センチ。矜羯羅童子像は木造・彩色・玉眼、像高五四・〇センチ。

2. 高梨純次「滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の調査報告」『成安造形大学附属近江学研究所 紀要』第十号 二〇二一年

3. 高梨純次「滋賀県愛知郡愛荘町・常照庵の木造不動明王二童子像の考察―常照庵の木造不動明王二童子像の研究Ⅱ―」『成安造形大学附属近江学研究所 紀要』第十一号 二〇二二年

4. 『近江愛智郡志』第五卷「第十章 秦川村 常照庵」の項。

5. 『第十章 秦川村 常照庵』所収『近江愛智郡志』第五卷 金剛輪寺文書

5. 「第十章 秦川村 常照庵」所収『近江愛智郡志』第五卷 常照庵文書
6. 母利美和「第二章藩政の成立と展開 第三節家臣の家のしくみ 木俣家の家のしくみ」(彦根市史編集委員会編『新修彦根市史第二巻通史編 近世』二〇〇八年)。以下、木俣守安に関わる記述は、この研究によっている。
7. 「第十章 秦川村 常照庵」所収『近江愛智郡志』第五卷 常照庵文書
8. 阿弥陀如来坐像は、木造・漆箔、像高一三八・三センチ、平安時代、重要文化財。参考文献としては、寺島典人「十九 木造阿弥陀如来坐像」(秦荘町史編集委員会『秦荘の歴史 第四巻 資料』二〇〇九年)、高梨純次「三九 阿弥陀如来坐像」(神仏います近江実行委員会『特別展 神仏います近江』展覧会図録 二〇一一年)など。
9. 「二〇九 阿弥陀如来像 金剛輪寺」副島弘道『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 四』中央公論美術出版 二〇〇六年
10. 「九六 聖観音菩薩像 仏心寺」高梨純次『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇 四』中央公論美術出版 二〇〇六年
11. 「滋賀・西願寺阿弥陀如来坐像について」桑野梓『佛教藝術』三三二 二〇一四年
12. 「御知行所物成帳」二四八村崎家文書『新修彦根市史第六巻 史料編 近世 一』所収 彦根城博物館所蔵
13. 「敏満寺跡発掘調査報告」弥永貞三『滋賀県史跡調査報告 第十二冊』滋賀県教育委員会 一九六一年
14. 弥永貞三『奈良時代の貴族と農民』一九六六年 至文堂
敏満寺公民館『敏満寺史』一九七六年
多賀町教育委員会『敏満寺遺跡石仏谷墓跡』サンライズ出版 二〇〇五年
15. 文化庁『湖東地方の文化財』一九七五年
「滋賀・多賀町の仏教彫刻―真如寺と敏満寺大日堂を中心に」斎藤望『佛教藝術』一九三 一九九〇年
多賀町教育委員会『多賀町文化財調査報告書 第一集 考古・美術工芸品』一九九一年
16. 「滋賀・敏満寺大日堂銅造大日如来坐像と敏満寺の鎌倉復興」高梨純次『佛教藝術』二一五 一九九四年
17. 「胡宮神社文書 一」敏満寺事書 所収『多賀大社叢書 諸家篇 一』
18. 「敏満寺とその周辺の遺跡」音田直樹『青龍山 敏満寺と東大寺』展覧会図録 多賀町歴史民俗資料館 一九九二年
19. 「胡宮神社文書 十一 川瀬右近覚書(延享三年四月)」『多賀大社叢書 諸家篇 一』
20. 「胡宮神社文書 二一 福寿院口上書之覚(安永四年四月)」『多賀大社叢書 諸家篇 一』
21. 高梨純次 前掲論文(16)
22. 「胡宮神社文書 一」敏満寺事書 所収



写真1 木造不動明王立像



写真2 木造制吒迦童子半跏像・右脇侍



写真3 矜羯羅童子立像・左脇侍



写真4 木造阿弥陀如来坐像 常照庵



写真5 阿弥陀如来坐像 像底

雄琴の土豪和田氏の出自について

大津市文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員

和田 光生

雄琴の土豪和田氏の出自について

大津市文化財保護課主査／成安造形大学附属近江学研究所客員研究員 和田 光生

Name:

WADA Mitsuo

Title:

About the Origins of the Wada Clan of Ogoto

Summary:

Hidezumi Wada, a samurai of Ogoto who sided with Mitsuhide Akechi and cooperated in the burning of the Enryaku-ji temple complex on Mt. Hiei in 1571 during the Warring States period, is shrouded in mystery. In the Wada family, it has been said that he was a retainer of the Rokkaku clan, the feudal lords of Omi Province, but there is no definite proof. This paper examines materials held by the Mibu family, middle-ranking nobles in Kyoto who were the lords of Ogoto, which show a connection between Wada and the Hata clan, who previously governed Ogoto in the late Muromachi period. Hata is assumed to have been connected with Enryaku-ji temple on Mt. Hiei.

はじめに

前回、比叡山焼き討ちについて、明智光秀が、雄琴の土豪和田秀純（一五三〇—一六〇三）に送った書状を手掛かりに検討してみた^{〔註1〕}。和田秀純が、私の先祖にあたることからの私的な興味に引きずられての素人解釈で、本稿もその延長線にあつて、和田氏の出自を探ろうとするものである。内容として、極めて個人的な問題意識による行論であることをまずお断りしておく。

ただ、中世後期、近江湖西地域の雄琴という一村落に居住する和田秀純が、どのような立場で明智光秀の懐柔を受け入れるに至ったかは、大きな歴史を考える上ではささいなことであるが、湖西地域や雄琴の歴史、そして私の家の歴史を考える上では、きわめて重要な問題と思っている。もしこうした小さな出来事の積み重ねが大きな歴史に波紋を及ぼすことがあるというのであれば、この検討も無意味ではないかもしれないという淡い思いから、覚束ない行論ではあるが、課題に取り組んでみたいと思う。

まず、この書状を受け取った和田秀純とは、何者だったのかを探ってみることにしよう。

一、家伝における和田秀純の出自

江戸時代中期、和田玄通によってまとめられた『江西和田家記』^{〔註2〕}は、和田秀純から書き始められ、元禄期頃までの和田家の主要人物の事績をまとめた家伝である。その書きだしで、まずその出自を次のように記している。

廿代佐々貴近江守政頼之子 末子 和田信濃守
高成 高成より四代之孫也

はじめに佐々貴政頼という人物が登場する。この人物は、六角政頼を指すが、政頼はその実在が危ぶまれる人物である。その末子、高成なる人物も、当然ながら実在が確認できない。ましてその四代目が和田秀純とされているのであるから、この系譜は相当怪しいことになる。

そして秀純が雄琴に來たのは永禄九年（一五六六）のこととされる。「永禄九年正月廿八日度々の軍功により、江州大屋形義秀卿の命を蒙り、滋賀郡の旗頭として雄琴城を賜う」と記されており、和田秀純は、六角義秀の命をうけ、滋賀郡の旗頭として雄琴にやってきたことになっている。

ところが、この六角義秀は、近世の偽書として著

名な『江源武鑑』に登場する人物で、その実在は当然怪しい。和田秀純の立場は、六角の被官だが、雄琴に來た二年後の永祿十一年（一五六八）には、織田信長が足利義昭を奉じて上洛し、六角承禎は甲賀・伊賀に逃れており、六角の影響力は弱体化している。六角の被官という立場は、これに比例して脆弱になつていったはずだが、その二年後の元龜元年（一五七〇）には、志賀の陣で浅井長政・朝倉義景連合軍に味方して織田信長に対峙し、翌、元龜二年（一五七一）には、明智光秀に味方して先の書状を受けている。この選択は和田秀純の判断であるが、雄琴の命運を左右する判断であり、秀純が地域において一定の影響力を持つていたからこそ下せた選択といえる。この時、明智光秀が守る宇佐山城に、単身で乗り込み秀純の意向を伝えた八木氏も、秀純と同じ雄琴の土豪だったと考えられる。和田と八木は、同じ考えで光秀に味方することを決めているのである。先の書状には、堅田衆との親戚関係なども触れられているが、地域に根を張っていた土豪だからこそ築けた関係性といえる。

つまり和田は、長年地域に定着し、地域の人心を把握したリーダーだった。だからこそ、地域の命運を左右する判断ができたといえるのではないか。雄琴に來てわずか五年余りの間にそのような地位を築けたと『江西和田家記』は語るが、この記述を鵜呑みにすることはできない。

このように出自が怪しい和田秀純だが、実在したことは確かである。彼は、元龜二年、光秀の懷柔を

受け入れ、光秀の味方となつて比叡山焼き討ちに協力し、その後も、元龜三年（一五七二）の今堅田攻めにも協力している。和田家には、この間の明智光秀書状が三通残されており、間違いなく戦乱の中で一定の存在感を示していた。その後、明智軍に従軍したかは定かでないが、天正十年（一五八二）の坂本城落城にあたり、雄琴城を廃城したと『江西和田家記』には記されている。晩年は、どの武将にもつかず、慶長八年（一六〇三）にその生涯を終えた。和田秀純の墓は、和田家の墓地の最上段、奥まつた場所に祀られている。現在に続く和田家の祖先は、間違いなく秀純である。しかし、『江西和田家記』が語る秀純の出自は、信頼できるものではない。彼は何時どこから來たのだろうか。

『江西和田家記』は、和田家のみに伝えられた家伝であるため、その史料批判も、個人的な問題といえるが、一般に知られる郷土資料で、秀純はどのように語られているのだろうか。

享保十九年（一七三四）、膳所藩の儒者寒川辰清によつてまとめられた近江の地誌『近江輿地志略』^{〔註3〕}の記事を見てみよう。そこには「雄琴古城跡」として「相伝和田源内左衛門秀純居城の跡なりといふ。（中略）按ずるに秀純は佐々木六角高頼の弟、大膳大夫高盛の子也。」と見える。『江源武鑑』を偽書と嫌う寒川辰清であるから、六角政頼や義秀こそ登場させていないが、大膳大夫高盛の子という曖昧な推測を記している。明治十四年（一八八一）の『滋賀郡誌』^{〔註4〕}でも「秀純ハ六角高頼ノ弟高盛ノ子ニ

シテ源内左衛門又中務丞ト称ス、永祿九年丙寅五月六角義秀、秀純ヲ以テ滋賀郡旗長トス」とあり、『近江輿地志略』の説を踏まえ『江西和田家記』の記事を加えた記述となっている。明治二十四年（一八九一）、北川舜治『近江名跡案内記』^{〔註5〕}でも六角高盛の子という『近江輿地志略』の説が踏襲されている。このように諸書は、雄琴城主であつた和田秀純を、六角の被官と解釈したかつたようである。ただ、その根拠となる史料を欠き、曖昧な推測に終始している。和田家の家伝である『江西和田家記』自身が、怪しい系譜を語っているのだから無理もない話なのだが、子孫の立場からすれば、もう少し確かな手がかりが欲しいところである。

そんな中『江西和田家記』で、先の記事に続く文章がこの問いへのヒントになるのではないかと思えて、以前から気になっていた。「この城主元は畑河某山徒にてこれあるよしなり」との記事である。秀純が入城する以前、雄琴城主は、山徒畑河某の居城だったと伝えているのである。山徒とは、延暦寺の大衆を指す。その実態は検証されておらず不明な点が多いが、室町時代、幕府より任命された山門使節は、山徒の有力者で、延暦寺の実務を担っていた^{〔註6〕}。延暦寺が関係する各地に、山徒はいたのだろう。

この畑河氏と関連するかは定かでないが、和田家の出身者で、嵯峨二尊院の住職となつた寛空（一六四七―一七〇三）という僧がいる。元は、西塔南尾溪廣院の再興第四世院主で、はじめ権大僧都靜然と

称した。『西塔堂舎並各坊世譜』^{〔註7〕}には、次のように記されている。

第四世権大僧都静然、姓ハ畑氏、江州雄琴ノ人也。延宝元年院ヲ尸、貞享年中命ヲ承リ日光山ニ抵輪王大王ノ御院ヲ監ス、元禄四年嵯峨二尊院ニ移住ス、改テ寛空卜名、七年院ヲ弟子恵雲ニ付、十六年五月十八日二尊院ニ卒、時二年五十七歳、塔ヲ彼院此山両所ニ起ス

『江西和田家記』では、高盛（和田秀純の孫）五男寛空存親大和尚とあり、系図や過去帳でも確認できる和田家出身者である。

ただ寛空について『西塔堂舎並各坊世譜』では「姓ハ畑氏」と記されている。なぜ畑氏なのか、単なる誤りなのだろうかとも考えたが、畑と和田では間違いないようがない。「畑河某山徒」という畑河にも似通う「畑氏」なので、全くの誤記とも思えず、謎のまますつと引つ掛かっていた。

二、壬生家の日記に見える畑と和田

私は現在、雄琴神社の歴史をまとめる作業をしている。その中で、壬生家と雄琴庄の関係を整理すべく、壬生家文書や壬生家歴代の日記に見える雄琴庄関係記事を調べている。ちなみに、雄琴庄は、中世小槻家の荘園で、雄琴神社は同氏の氏神とされ、雄琴神社の祭神小槻宿祢今雄は小槻氏の祖、同氏に

とって特別な荘園と位置付けられていた。これは、隣村苗鹿村も同様で、苗鹿村には、小槻宿祢今雄が建立したとされる法光寺があり、同氏の氏寺とされていた^{〔註8〕}。

もう少し小槻氏について触れておく。小槻氏は、平安時代後期以来、宮中の太政官弁官局で上首の地位にあった地下官人（中級貴族）である。左大史（大夫史とも呼ぶ弁官局の最上位）の地位を世襲し、太政官の事務方のトップという地位にあり、官務家とも呼ばれた。小槻家の力の源泉は、記録を司っていたことで、宮中の文書庫の一つ「官文殿」を管理し、私邸にも官文庫を設け膨大な文書を保管していた。過去の記録は、政治的判断の基礎となる。その中枢にいた小槻氏は、朝廷の実務上不可欠な家となっていたことから、平安時代後期から江戸時代にかけてその地位を保ってきたのである^{〔註9〕}。

そんな小槻氏は、鎌倉時代より、後の壬生家、大宮家の二系統に分かれ、いずれかが大夫史を担っている。戦国時代、大宮家は断絶するが、壬生家は存続し、江戸時代も揺るがない地位を保っていた。そして、中級貴族小槻氏にとって、雄琴庄・苗鹿庄は、祖先である小槻宿祢今雄にまつわるゆかり深い地であり、京都にも近いことから、同氏の重要な荘園と位置付けられていた。

近世に入ると、雄琴村・苗鹿村は、壬生家の手から離れる。苗鹿村は、寛永十一年（一六三四）に膳所藩領となり、雄琴村は、明暦元年（一六五五）滋

賀院門跡領となる。

しかし、壬生家にとって雄琴・苗鹿村は、祖先ゆかりの地として崇敬され、そのつながりを保っていた。

近世、壬生家歴代当主の日記を見ると同家の年中行事として、正月五日、苗鹿村から苗鹿社に備えられた供物（鏡餅）が到来し、四月、雄琴社の祭礼日（四月一番の申日）と苗鹿社の祭礼日（四月二番の酉日）に、私邸で遥拝が行われている。そして十一月の両社の御火焼にも壬生家で祭祀が行われていた。

壬生家にとって特別な地と認識されていたことから、近世前期には、壬生家の当主がしばしば雄琴・苗鹿を訪れ、苗鹿社・法光寺・雄琴社を参拝している。その実態は、歴代当主の日記で確認でき、例えば『小槻孝亮宿祢記』元和四年（一八一八）六月九日条には、次のような興味深い記事が見られる^{〔註10〕}。

九日 丙寅晴

自昨夜構神事、今朝、参詣江州苗鹿今雄両社、忠利同参之、畑源三郎貞綱孫勘兵衛出来、今対面、彼貞綱者于恒宿祢補任有之

補任 江州雄琴庄夫代米代官職事

定補 畑源三郎貞綱

右條々任嚴重之證文之旨以件人所補彼職也

早守先例、年貢諸公事物等可有其沙汰、万一雖為一事有不法懈怠之儀者任契約之旨可令勤改動彼職者也、敢

以勿令違失故下

大永六年七月十一日

左大史小槻宿祢(花押) 于恒宿祢判体如斯

元和四年六月九日、壬生孝亮(一五七八—一六五二)と忠利(一一六六—一六六三)親子は、前日夜に参拝に備えて神事を行い、先祖を祀る雄琴社と氏寺がある苗鹿の苗鹿社(那波加神社)を参拝している。雄琴社を「今雄社」と表記しているのは、壬生家にとって祖先である小槻宿祢今雄を祀ることから、壬生家の立場で「今雄社」と呼んでいたようだが雄琴社を指している。この参拝の折、二人は雄琴で畑源三郎貞綱の孫勘兵衛と出会っている。そこで勘兵衛から畑貞綱が壬生于恒から授かった「雄琴庄夫代米代官職」補任状を披見し、日記に記録しており、それは大永六年(一五二六)に発給されたもので、于恒の花押を認めている。問題は、この勘兵衛である。和田秀純の嫡男は、和田勘兵衛正盛で、寛永六年(一六二九)、六十一歳で亡くなっており、壬生孝亮が出会った勘兵衛は、この和田正盛であった可能性が高い。

同じ『小槻孝亮宿祢日記』寛永元年(一六二四)六月十五日条には、「雄琴畑勘兵衛来令対面風折烏帽子直垂賜之仰神事之時可着之由」という記事が見える。近世和田家は、雄琴社の神職を勤めており、それは正盛からはじまった。正盛の嫡男高盛の記事に「雄琴大明神之神職前代之通務」(『江西和田家記』)と見え、正盛の時から雄琴社の神職だったことがわ

かる。勘兵衛は、壬生孝亮を訪ね、風折烏帽子、直垂を賜っており、用途としては、神事の時に着用するためであった。まさしく神職の装束である。ここでも「畑勘兵衛」として壬生家を訪れている。

孝亮の嫡男、壬生忠利の日記では、正保三年(一六四六)九月二十四日条に、苗鹿大明神(那波加社)に参拝しており、その時「畑勘兵衛子三十疋」とある。勘兵衛正盛の子に三十疋遣わされており、和田正盛の子、和田五兵衛高盛へ遣わされたものと思われる、ここでも畑姓となっている。

忠利は、その二年後、正保五年(一六四八)九月十三日にも苗鹿大明神を参拝しており、その時は「雄琴大明神幣料十二匁 在所中江十匁遣 和田勘兵衛三十疋遣」とあり、ここでは二年前と同じ三十疋を「和田勘兵衛」に下賜したとある。二年前の日記と同様「勘兵衛子」とあるべきだが、「子」が抜けているとして、高盛に下賜されたとみてよいだろう。注目すべきは、畑姓ではなく和田姓となっている点で、いずれも同一人物を指す。

忠利の苗鹿大明神への参拝は、慶安五年(一六五二)四月二十日にも行われており、この日は同社の祭礼日に当たっていた。この時、「今雄御社参幣料十二匁畑五兵衛へ三十疋在所中江十匁一献有畑五兵衛子二人出逢」とあり、忠利は那波加社参拝の後、雄琴社を参拝しており、「今雄社」との表記も注意されるが、ここでは畑五兵衛の子と出合い、一献の饗応を受けている。畑五兵衛は、和田五兵衛高盛を指すが、忠利は畑姓で記している。

ところが承応三年(一六五四)四月二十五日、壬生忠利は再び苗鹿大明神の祭礼日に参拝し、雄琴社へも参拝しており、この時は「雄琴大明神江参御幣料十二匁在所中江十匁和田五兵衛三十疋和田子三人江持扇子二本宛遣珍重云々」とあり、同一人物が和田姓で表記されている。

明暦元年九月十日、壬生忠利はみたび苗鹿大明神を参拝しており、この時も雄琴社へ参拝している。「雄琴大明神へ参奉幣料拾貳匁和田五兵衛三十疋子三人持扇子本ツゞ但壺匁二三本扇也在所中へ拾匁遣之五兵衛所にて食有」と参拝の後、和田五兵衛高盛邸で饗応を受けた。ここでも和田姓で記されている。

このように壬生家にとって、和田家は、雄琴庄の代官であった畑源三郎貞綱の末裔であり、畑氏と認識されていたようだ。したがって和田姓には、馴染めず、畑姓で表記したのだろう。その後も、壬生忠利の嫡男重房が寛文五年(一六六五)三月十五日に雄琴を訪れた時も、「畑五兵衛」と記しており、同様の混乱が見られる。

この混乱はひとえに、壬生家から見ても、和田が雄琴庄代官であった畑の系譜を引く家と認識されていたからであろう。六角氏の被官という和田氏の主張とは異なり、壬生家からは雄琴庄代官畑氏と理解されていたのである。それは、壬生家の思い違いではない。元和四年、和田正盛は代官補任状によって自らの系譜を語り、寛永元年には代官の末裔である畑として壬生を訪ね、風折烏帽子と直垂を賜っていたことから見ても、正盛はそうのように振舞っていた

と考えられる。

もしそうであれば、和田秀純の時代に、何らかの理由で畑から和田に改姓したのだろうか。もしくは、和田が畑に入れ替わり、畑の系譜を継承したとも考えられよう。その詳細を推し量ることはできないが、かつての雄琴庄の領主であった壬生家や延暦寺から見ると和田氏は雄琴の代官畑氏の系譜を引く家と認識されていたのである。

もし和田氏と畑氏が同一であるとするならば、少なくとも室町時代後期には、雄琴庄代官職を担う家であった。地域に根付いて一定の影響力を行使する立場にあったといえるだろう。だからこそ、明智光秀の懐柔を受け入れる選択も出来たのではないだろうか。

三、室町時代後期の雄琴庄

室町時代後期、小槻家による雄琴庄・苗鹿庄の支配状況については、『壬生家文書』^{〔註1〕}や壬生家歴代の日記類に散見される。断片的な記事を在地の状況に落とし込むだけの力量がないため、間違った解釈になるのかもしれないが、次に雄琴庄代官畑氏に注目してみることにしよう。

嘉吉元年（一四四一）「壬生家所々年貢注文」（『壬生家文書』九十九）によると、「苗鹿庄八十石、雄琴庄二十石（但京着十四石）」と見え、大永四年（一五二四）「近江国雄琴庄年貢算用状」（『壬生家文書』四六九）でも二十石と見えることから、室町時代中

期の年貢高は、二十石だったことがわかる。ただ、雄琴庄が負担していた義務は、年貢だけでなく、公事もあった。壬生家への供物の調進も大きな役割であった。年不詳、室町時代中期と推測される、雄琴庄の年貢・公事の全体像は、次の文書からうかがえる（『壬生家文書』一二八九^{〔註11〕}）。

雄琴庄成分

宣旨ノ外

廿石 此内六石代官給二引、

五斗御灯米ニヒク、

三斗調子二引

三月三日 小餅四百 銭二百文

三月草代ニ 参貫文

五月五日ニ 〔チ〕マキ数四百 銭 二百文

七月 ねいも一折

八月一日小餅 二百五十

九月九日小餅 数同、銭二百文

十月亥子二同 百五十

十二月炭廿把、納豆卅把

同月末二簾疊代 三貫百五十文

七百五十文

以上

年貢としては廿石だが、内六石は代官給、そのほか八斗が引かれていた。

公事については、例えば十月の亥子について、応永十四年（一四〇七）「亥子餅注文」（『壬生家文書』

二九二）によると、壬生家が関係する三か所の荘園から餅が届けられていた。主殿寮領撰津国探銅所から六五〇、苗鹿預所から一五〇、同公文二〇〇、雄琴一五〇と見え、計、一一五〇個という膨大な餅が到着し、これらは、関係者に配分されていた。

壬生晴富の日記を見ると、五月四日「雄琴粽以下、官務方に到来、幸甚々々」（文明十一年）、三月十三日「雄琴草代到来」（明応六年）といった記事が見え^{〔註12〕}、壬生于恒の日記でも、「小野雄琴庄節供物悉調進」（永正十八年三月三日条）とあり、三月、五月、九月の節供や八朔等、壬生家のためにたくさん餅を搗き、五月節供には粽を四〇〇個も作り納めていたほか、冬場の燃料、正月の畳や御簾など、壬生家の日常を支える役割を担っていた。先の文書に書かれた公事以外にも、正月に若菜を納めていたようで「雄琴庄若菜到来」（天文二年一月六日条）といった記事も見られ、密接な関係が築かれていたことがわかる。

こうした年貢や公事を壬生家に納める責任者として、代官が補任されていた。『雅久宿祢記』文明八年（一四七六）三月二十八日条に「雄琴代官職事畑藤井松林三人」と見え、雄琴庄の代官として畑・藤井・松林の三人がいたことがわかる。苗鹿庄についても、白子氏が代官であった。

大永五年（一五二五）七月一日、畑源三郎が、「雄琴庄夫代米代官職」に補任されていたことは、先に見たが、それに先立つ大永四年（一五二四）雄琴庄年貢算用状が、「はた源三郎」から御本所政所に提

出され、二十石の年貢を納めたと報告している(『壬生家文書』四六九^{〔註11〕})。畑源三郎は、大永四年以前から代官職を補任されていたのであろう。

天文二年(一五三三)三月二十九日、壬生家より雄琴庄草代未納について使者が遣わされ、畑代宗慶が返答している(『于恒宿祢記』)。

天文十三年(一五四四)十一月二十日、壬生殿御政所へ提出された算用状は、畑代家吉が差し出している(『壬生家文書』一四〇〇^{〔註12〕})。いずれも畑氏の関係者であろう。

天文二十四年(一五五五)十月吉日雄琴庄本所分算用状は、畑弥五郎貞能の差し出しである(『壬生家文書』一二八一^{〔註13〕})。

永禄年間の記事(年不詳)にも代官として藤井・畑の名が見える(『于恒宿祢記』)。

このように畑氏は、十五世紀後期から十六世紀を通じて、雄琴庄代官として壬生家に補任され、活動していたことが確認できる。この畑氏の地位を引き継いだのが、和田氏であったならば、近世になっても、壬生家から見た雄琴村の代表は畑氏であり、それが和田と畑の混同に結びついたのであろう。

ちなみに、元亀二年、和田秀純と共に明智光秀に味方した八木氏についても、天文九年(一五四〇)五月五日の条に「雄琴片代官」としてその名が見える八木平兵衛尉貞治と繋がっているのかもしれない(『于恒宿祢記』)。片代官とは代官の補佐のような役割か判然としないが、この時、八木は、壬生家に対し「縫殿助」という官職を所望し、壬生于恒が補任

している。壬生家にとって必要な人物と映っていたからであろう。

断片的な史料ではあるが、雄琴庄の代官は、文明八年の段階で、畑・藤井・松林が請負っていた。永禄年間の記事に代官畑・藤井と見えており、両家が継続して代官職を担っていたようだが、算用帳などに名前が見えるのは畑氏やその関係者(畑代)などで、雄琴庄の代官を中心的に担っていたのは畑氏と思われる。八木氏もその補佐として活動していたのであろう。

では、和田氏が畑氏の系譜を引く家だと仮定すると、畑氏は、果たして六角の被官だったのだろうか。詳細は省くが、『長興宿禰記』^{〔註14〕}文明十三年(一四八二)十月八日条に次のような記事が記されている。

苗鹿村代官白子山城守注進、甲賀住人伴太郎左衛門尉、押領すると云、近日西近江辺、六角高頼被官等打入押取の類か、苗鹿村坂本六ヶ所の内、山門相拘わる間、武士乱入の煩いなき地なり、猛悪の輩の張行

隣村苗鹿村の出来事である。この時は、大宮長興(一四二二—一四九九)が苗鹿村を領しており、その在地代官が白子山城守貞宗であった。その白子からの情報で、六角高頼の被官で甲賀の伴太郎左衛門尉が、苗鹿村を押領しようとしていると知らせてきた。近頃、六角高頼の被官が西近江に進出しはじめ

ており、その類かと、長興は推測している。その上で、苗鹿村は坂本六ヶ所の中で、延暦寺が深く関わる地なのだから、武士乱入の煩いがない場所と理解していたことを記し、猛悪な輩の強引な行いと非難している。

このあと長興は直ちに、延暦寺に働きかけ、六角高頼の行動を阻止するように依頼している。翌年、延暦寺は所領押領により六角高頼を幕府に訴えている。苗鹿村の事件だけではないのだろうが、この頃、六角高頼は寺社領や幕府奉公衆の所領を押領するなど、幕府の指示を無視する行動を繰り返していた。このため、長享元年(一四八七)第一次六角征伐が、將軍足利義尚によって行われている。

それはさておき、ここで注意されるのは、苗鹿村が坂本六ヶ所の一つで、延暦寺の影響下にあり、武士乱入の煩いがない土地であると、大宮長興が認識していたことである。「坂本六ヶ所」がどの範囲を指すか不明だが、延暦寺膝下の湖西地域は、その強い影響力に護られ、守護六角勢力の入り込む余地のない土地と考えられていた。当然、六角被官が押領することも、侵入し在地土豪化することも考えられない地域だったのである。

雄琴庄についていうなら、永禄十二年(一五六九)まで壬生家領として存続していた。

足利義昭を奉じて上洛した織田信長は、家臣に近江の要所を守らせ、湖西の宇佐山城には森可成を配し、京に入る人や荷物の管理、滋賀郡や湖西方面の監視を担った。その森可成は、永禄十二年十一月二

十七日付、安倍安大夫への書状で「彼（雄琴）の御領の儀につき、先々の如く相違なく仰せ付けらるべく候」（『壬生家文書』一二八五^{註1}）と伝えている。安倍氏は、壬生家の家司を勤めていたと思われる人物なので、この書状は森可成が、壬生家の所領の内、雄琴庄について安堵したことになる。おそらく雄琴庄は、六角氏によって押領されることなく、信長政権下でも壬生家領分は維持され、在地の安定がはかられていたのである。

壬生家領雄琴庄が維持されていたのであれば、この時期まで畑氏も雄琴庄代官職に従事していた可能性は高い。しかし、家伝では、和田秀純が雄琴に居て、翌年の志賀の陣では浅井・朝倉軍に与し、元亀二年には、比叡山焼き討ちを直前に控え、明智光秀に与することを選択した。雄琴の在地を掌握していた代官畑氏と和田秀純を同一の系譜を引く人物と想定すると、この流れはスムーズに理解できるように思うのだが、もちろんその根拠となる史料は一つもない。このため、一つの憶測にすぎないのだが、もしそうであれば、『江西和田家記』にあった「この城主元は畑河某山徒にてこれあるよしなり」という記述が注意される。

苗鹿庄が延暦寺の影響下で守られ、守護の介入がない地と大宮長興が認識していたように、比叡山麓の地は、延暦寺との何らかの関係のもとで地域が守られていたのではないだろうか。そして、各地域で、その役割を担っていたのが山徒ということになる。

雄琴庄の場合、実態はわからないが一部が延暦寺

領であった可能性があり、畑氏が山徒としてその管理にあたっていたとするならば、同じ雄琴庄壬生家領についても、同家から代官職を補任され、職務を請け負っていたのではないか。

山徒の実態は不明な点ばかりで、今後検討すべき課題だと思っているが、戦国時代には、山徒としての役割よりも、在地土豪として状況を見極めた独自の判断をする必要に迫られていたのではないか。雄琴庄の元亀年間の状況はまさに生き残りをかけた選択の連続だったように思える。

おわりに

元亀二年、明智光秀に与することを選択した雄琴の土豪和田秀純の出自とは、という問いが本稿の課題であった。筆者は以前から『江西和田家記』などで説かれる六角氏の被官という説明に漠然とした違和感を覚えていた。今回、壬生家の諸資料を検討する中で、室町時代後期、雄琴庄代官だった畑氏との連続性が浮かび上がってきたことは大きな発見だった。畑氏から和田氏へ改姓したのか、その系譜を引き継いだのかは判然としないが、戦国時代、在地土豪が生き残っていくには、様々な戦略が必要だったことは想像に難くない。そのような振舞の一つとして、畑氏をリセットする必要があるのだろう。単なる改姓ではなく、新たに和田氏としての歴史を築こうとした点は、近世への転換点での選択だったのだろう。雄琴という湖西の小村の中でも、複雑なド

ラムが展開していたのである。

註

1. 拙稿「比叡山焼き討ちと天正の復興——明智光秀の果たした役割——」『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第十一号、令和四年（二〇二二）三月二十五日発行。
2. 筆者蔵。和田秀純―正盛―高盛と続く和田家の諸氏の事績を高盛の次男秀時の子である和田玄通がまとめたもの。筆者所蔵本は、天保七年の写本。
3. 『新註近江輿地志略』三三六頁 弘文堂書店 昭和五十一年
4. 『近江国滋賀郡誌』五三九頁 弘文堂書店 昭和五十四年
5. 『近江名跡案内』二七五頁 著者兼発行者 北川舜治 明治二十四年
6. 下坂守『中世寺院社会の研究』、平成十三年、思文閣出版。第一篇山徒の存在形態で、山門使節の実態を詳細に検討されている。
7. 『天台宗全書』第二十四巻 一四八頁 第一書房 昭和五十年
8. 小槻氏の莊園であった苗鹿庄に関する訴訟文書の中で「雄琴社は彼所の鎮守、当家の氏神、大炊神と号し、いわゆる今雄宿祢これなり」という文言がしばしば見られ、文永十年（一二七三）「官宣旨案」（『壬生家文書』一二七三）が古い記事である。
9. 小槻氏については橋本義彦『平安貴族社会の研究』（一九七六、吉川弘文館）や井上幸治『古代中世の文書管理と官人』（二〇一六、八木書店）など。
10. 小槻氏歴代の日記類は、宮内庁書陵部に所蔵されており、一部アーカイブで閲覧できるようになっている。本稿では、明治三十六年、雄琴神社の社格昇格運動に

11.

伴い、作成された歴代壬生家当主の日記類のうち、雄琴・苗鹿に関する記事の抜粋を典拠にした。東京大学史料編纂所の前身にあたる史料編纂係に所属していた佐藤忠淳氏が作成したもので、現在「雄琴苗鹿共有文書」となっている冊子。雄琴神社昇格運動については拙稿「村の誇りを創出する」（須藤護ほか編『民俗学の射程』、二〇二二、晃洋書房）。

宮内庁書陵部所蔵の『壬生家文書』については、宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 壬生家文書』一〇（明治書院）として刊行されている。本稿では『壬生家文書』に付された文書番号で出典を表現した。刊本との関係は、

『壬生家文書』一（昭和五十四年）九九・二九二

『壬生家文書』二（昭和五十五年）四六九

『壬生家文書』五（昭和五十八年）一二八一・一二八五・一二八九・一四〇〇

雄琴庄、苗鹿村関係の文書は、『壬生家文書』五に納められている。

宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 晴富宿禰記』明治書院昭和四十六年

『史料纂集』一五 長興宿禰記』続群書類従完成会平成十年

12.

13.

近江における地蔵盆

―最小単位の地縁コミュニティ―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤 賢治

近江における地蔵盆
ー最小単位の地縁コミュニティー

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

Name:

KATO Kenji

Title:

Jizōbon in Omi: The Smallest Unit of the Local Community

Summary:

Jizōbon, a traditional summer event centered in the Kansai region that honors the *Jizō* deities, has long been passed down as a children's festival. It is considered to hold an important position as the smallest unit of the local community within a town. I would like to trace the origin of the event from the perspective of *Jizō* belief and consider its role in the future.

はじめに

「地蔵盆」というと京都市内の代表的な民俗行事の一つであると認知されている。夏の風物詩として八月の下旬、お盆休みが明けた次の土曜日と日曜日の二日間、町内会の単位で開催されるというのが、一般的であろうか。本来は旧暦で地蔵菩薩の縁日にあたる七月二十四日がその日となるが、現在では、新暦の八月二十四日前後の土日に行われている。子供の祭りであり、主役の子供たちが楽しむことができる金魚すくいやおやつ配り、豪華景品が当たる福引きなどのイベントを大人たちが準備するのである。お寺の住職の読経や百万遍数珠繰り（数珠まわし）、御詠歌の奉納などの仏事的な行事もあるが、どちらかというと楽しい催しが中心である。

筆者は京都市中京区の出身であり、まさにこの「地蔵盆」にお世話になった。お盆休みの楽しい家族旅行が終わり、夏休みも残すところあと少し。宿題も残っているが、それを気にしながらも最後の楽しみとして「地蔵盆」があった。もう四十数年前の遠い昔の話であるが、筆者が暮らしていた町内には多くの子供たちがいた。市内の中心部からは少し西に外れた高度経済成長期に出来上がった新興住宅地、いわゆる下町で小さな家がひしめき合っていた。その

ような場所で、地蔵盆は活気に満ち溢れた町内会の一大イベントであった。筆者の町内の近くにある一〇〇戸あまりが入居する新しいマンションでも地蔵盆が行われており、そこには、若い世代の家族がほとんどで、我々以上の盛り上がりがあり、羨ましく思ったことが懐かしく思い出される。

さて、筆者は三十歳になった年（平成九年 一九九七年）に近江（滋賀県）に移り住み、そこから近江をフィールドとして、宗教民俗の研究をはじめることになった。研究の内容は多岐に渡ったが、その傍らで「お地蔵さん」と呼ばれる石仏と、それを丁寧に安置する祠（ほこら）を至るところで見かけ、そこで繰り広げられる近江における「地蔵盆」という行事に興味を持ち続けてきた。

詳細は後述するが、これまでに取材した場所は、大津市仰木、今堅田、下阪本比叡辻、長浜市の旧市街地、野洲、そして近江八幡である。現状は、おそらく京都もそうであろうと思われるが、少子高齢化に直面し、長年に渡って続けられてきた大切な行事と理解しつつも、その継承に関しては、様々な不安を抱えているという現状がある。

京都市は、文化財保護課が中心となり、世代を越えて受け継がれてきた民俗行事で、町内の年中行事となっている「地蔵盆」の役割を再認識し、時代の

変化に応じた工夫や新たな趣向を取り入れながら、未来に引き継がれるように「京の地藏盆」を「京都をつなぐ無形文化遺産」として選定している。

今回の論考ではまず仏教思想、信仰としての地藏信仰のはじまりと広がり、そこから地藏会、地藏祭り、そして地藏盆へとつながる地藏盆の歴史などを紐解く。最終的に近江八幡における聞き取りを紹介し、近江における「地藏盆」の現状を報告するとともに、地域コミュニティのあるべき姿を考えてみたい。

第一章 地藏信仰と地藏盆のはじまり

(一) 地藏信仰とは

地藏菩薩の名前と姿

はじめに「地藏菩薩」の名前について考えてみたい。インドで生まれた時の名前は「クシテイ・ガルパ」であり、日本語で直訳すると「クシテ」は土地、大地を意味し、「ガルパ」は子宮という意味を持ち、胎、蔵なども翻訳される。すなわち「地藏」とは、「大地を自分の蔵とする者」ということになる。地藏菩薩は、大地を司る（担当する）菩薩であり、その大地は、我々にとって最も不可欠な酸素を供給する植物を育み、栄養分として補給する穀類や野菜、そしてそれらを捕食して成長する家畜を養うのである。他にも、化石燃料である石炭や石油、天然ガス、また、金属の元となる各種鉱物も大地から生まれてくるのである。

地球上に生きる全てのものが大地に由来し、その大切な大地を見守っている菩薩が地藏菩薩である。言い換えれば、我々は日常的に大地からの恩恵を受けているが、それはすなわち地藏菩薩のご加護であるともいえる。

次にその姿にも注目したい。我々が日常、目にする地藏菩薩像は、僧形で、右手に錫杖を、左手に「如意宝珠」を持つている。錫杖は、「行脚」の象徴であり、六道（地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・人間・天）の世界をあまねく歩き巡ってくださるという意味があり、上についている六つの輪は、「六波羅蜜」という菩薩が行うべき六つの修行（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若）を表している。如意宝珠は意のままに宝物を生み出すことができる宝の珠であるという。大地こそが我々が欲する全てのものを生み出すところであり、そこを見守っているのが地藏菩薩なのである。

地藏菩薩は、その名前、姿から、地球そのものを表す仏であり、衆生の様々な願いをかなえてくれる、現世利益を施し、霊験高い菩薩であると考えられてきた。

地藏菩薩が登場する経典等

地藏菩薩が登場する経典等について考えてみたい。「地藏三経」と呼ばれる経典がある。「仏説大乘大集地藏十輪經」「仏説地藏菩薩本願經」「占察善悪業報經」の三つの経典がそれにあたる。その他に、日本で作成された偽経であるといわれる「仏説延命

地藏菩薩經」や「十王經」^{註1}、三井寺（園城寺）の僧実睿がまとめた「地藏菩薩靈驗記」などがあり、これら経典に書かれている地藏菩薩の姿が、現在の地藏信仰のもとになっている。

「十輪經」には、地藏菩薩は多くの衆生を救うために、毎朝様々な禪定に入り、憂や苦しみ、飢え、病氣、争い、疲弊、煩惱、自然災害、悪鬼、怨賊などの苦しみから救ってくれる。また、先述の大地を守る仏であるという意味合いから、一切の草木の根、芽、茎、枝葉、花、果実を成長繁茂させることができると説き、年若い夫婦に代わって田植えをする地藏菩薩の伝説が各地で語られるなどしている。

そこから発展して、偽経であるといわれる「延命地藏經」には、衆生の苦しみを除き、安らぎをもたらす十種の福について説明されている。具体的に、「女人泰産」女性の安産。二、「身根具足」身体が健康である。三、「衆病悉除」病氣平癒。四、「寿命長遠」寿命が延びる。五、「聰明智慧」聡明な知恵を得る。六、「財宝盈溢」財産に溢れる。七、「衆人愛敬」人々に好かれる。八、「穀米成熟」五穀豊穰。九、「神明加護」神々に守護される。十、「証大菩提」悟りを得る。

そして、さらに以下の八種類の禍から逃れることができる^{註2}とされている。一、風雨災害。二、他国の侵略。三、国内の反乱。四、日蝕月蝕。五、星の異変。六、鬼神の災い。七、飢渴。八、病氣。

「十輪經」もさることながら、この「延命地藏經」によれば、この経典を大切にして地藏菩薩を礼拝供

養することで、多くの福に遭遇し、身の上に降りかかる様々な苦難を乗り越えることができるという、究極の現世利益を享受することができると説かれているのである。

地藏信仰の研究者である真鍋廣濟によると、正倉院文書の中に「地藏十輪經」などの地藏信仰に関する經典を書写した記録が見られることから、少なくとも奈良時代には地藏菩薩の信仰なるものがあつたと考えられる。

三井寺実睿の「地藏菩薩靈驗記」と『今昔物語集』

おそらくこれらの經典がもとになり、靈驗譚としてまとめられたのが、十一世紀半に三井寺(園城寺)の僧実睿が編集した「地藏菩薩靈驗記」であろう。ここには、より具体的に、どの誰が、どのように地藏菩薩と出会い、どのような恩恵を受けたのかということが説話として語られている。

そして、十二世紀のはじめに完成した説話集『今昔物語集』巻十七に所収されている三十二編にわたる地藏菩薩の説話は、実睿の「地藏菩薩靈驗記」がもとになっていると考えられている。また、ここで注目しなければならないのは、「靈驗記」をもとにしたという『今昔物語集』巻十七の地藏菩薩に関する説話の主人公が、大寺院の高僧や京都の名だたる貴族ではなく、地方の庶民であり、話の内容も庶民の生活の中にあるものが取りあげられている点である。

『今昔物語集』は、地藏菩薩に関する説話に限らず、

観音菩薩や阿弥陀如来など、仏教に関するものが収録され、全国各地に広がった。中世は、文字を読むことができる一般庶民はほとんど無く、『今昔物語集』に掲載されている仏教説話が、口承で伝わり、よく似た話が地方の伝説として、現実にあつたかのように語られ受け継がれていくという流れがあつたと考えられる。

中でも地藏菩薩に関する説話は、庶民の生活に近く、苦しみと生きる庶民にとって、心が救われる物語であり、地藏菩薩を熱心に信仰するという実践につながるきっかけとなつた。

(二) 地藏盆のはじまり

地藏盆のはじまりとその起源

庶民を中心とした地藏信仰の広がりについては、既述の通りであるが、今回の論考のテーマとなつている地藏盆については、どのような変遷があるのだろうか。正直なところ、民間信仰に基づく行事であるため、残された資料が皆無に等しく、そのはじまりや広がりについて詳細に論じている論考はほぼ存在しないのが現状である。

確実にわかっているところを見ていきながら、その全体像を想像することにしてみたい。

まず、地藏盆の開催日が、旧暦の七月二十四日あるいは新暦の八月二十四日であるのはなぜであろうか。これは、中国宋の時代に活躍した禅僧虚堂(きどう)(一八五―一二六九)が記した『虚堂録』による。中国五代(九〇七―九六〇)の時代、湖北省五祖山の

戒禅師が毎月一日から三十日まで日ごとに如来や菩薩を割り当て、礼拝していた。その儀礼が日本に伝わり、「三十日秘仏」^{〔註2〕}と呼ばれ、親しまれるようになった。その中で、地藏菩薩は二十四日が縁日となっており、年に一度、旧暦であれば七月、新暦ならば八月の二十四日に地藏菩薩のお祭りが行われるようになったと考えられる。

その祭り(地藏盆)はいづから日本で行われるようになったのか。地藏盆の起源については、真鍋廣濟の『地藏菩薩の研究』の中で少し触れられている。それによると、黒川道祐撰『日次紀事』の貞享二年(一六八五)七月二十四日の条に洛外の六地藏巡礼が盛んに行われていたことと、加えて以下のような記事が見える。

「洛下の兒童はおのおの香華を街衢の石地藏に供養してこれを祭る」(原文は漢文)

貞享二年の時点で、京都の街で地藏祭り(地藏盆とは書かれていない)なる子供の祭りが行われていたことがわかる。

また真鍋は、地藏祭りがはじまった理由には二つあるとしている。一つはこの『日次紀事』によるもので、この地藏祭りは、平安時代に鬼魅が入つてこないう京都市の町の四隅で神を祀つて祈つていた「道饗祭(あえ)り」という祭りが地藏盆となつたという説である。ただこの「道饗祭り」は平安時代から行われていたとされており、この祭りが、江戸の初めごろに

盛んになったであろう地蔵盆につながることは考えにくいと否定している。

もう一つは、寛文八年（一六六八）に森本迪菴（てきあん）によって刊行された『浄家寺鑑』^{〔註3〕}の記事によるものである。そこには江州園城寺（三井寺）の僧浄照が、子供のころ戯れに地蔵尊を描き、子供たちを集めて多くの花を地蔵尊に供えて遊んでいたが、成長して園城寺の僧侶となった時に病で亡くなった。冥界に入ると地獄の閻魔庁に行き、責め苦を受ける間際、一人の沙門（僧侶）が現れ、自分はかつて浄照が戯れに描いた地蔵尊であると告げ、その時から浄照を見守ってきたという。そして、地獄から救い出した。戯れに描いた地蔵尊であっても地獄から救ってくれるという話をもとに、親たちが、子供たちのために地蔵祭りを行うようになったと記されている。

真鍋は、この『浄家寺鑑』の記述は「地蔵祭り」であるが、これが地蔵盆のはじまりを示すものであると認識している。

地蔵盆が行われる地域

また、その範囲については、「地蔵盆の行われるのは近畿地区に限られており、他の地区には近畿のように盆月の二十四日に子供の手によって行われる地蔵祭り（地蔵盆・地蔵會）は見られないようである」と『地蔵菩薩の研究』に記されている。なお、地蔵盆の分布に関しては、文化庁が昭和四十四年（一九六九）に発刊した『日本民俗地図一（年中行事）

十七図・盆』に記載されており、当時の地蔵盆、地蔵祭りの開催地を知ることができる。

その範囲は、京都市、大阪府北部、奈良県、滋賀県という近畿圏に集中しており、その他、西日本では九州の一部、中部では愛知県、北信越では福井県、富山県、新潟県あたりに見られ、関東、東北、北海道にはほぼ見られない。

中でも滋賀県の地蔵盆については、林英一の『地蔵盆―受容と展開の様式―』にその調査の報告書があるが、琵琶湖の周辺、県内全域に点在しているという特徴が見える。

第二章 地蔵盆と地蔵石仏

（一）地蔵盆という行事の内容

現代の地蔵盆という行事の内容については、村上紀夫『京都地蔵盆の歴史』（法蔵館 二〇一七年）や、「京都をつなぐ無形文化遺産 京の地蔵盆」地域と世代をつなぐまちの伝統行事」というウェブサイトに詳しく紹介されている。具体的に以下に紹介してみる。

・日程

地蔵盆は、旧暦七月二十四日、または新暦八月二十四日（先述した地蔵菩薩の縁日）の当日と前日、あるいはその日付け付近の土曜日、日曜日を中心に行われている。

・開催される場所

石仏であるお地蔵さんを祀った祠の前が比較的多い。その他、個人宅の座敷や駐車場などの空き地、道路上、集会所、公園などで開催される。

・運営のかたち

町内会または、町内の子供会などが運営主体となつて、町内単位に行われることがほとんどである。運営は大人が中心である。かつては子供に託されていたところもある。また、鉦や太鼓などで行事の開始を知らせる役割など、子供も「地蔵盆」の運営に参画することで、多様な世代間の交流が見られる。

・お地蔵さんのお化粧など

「地蔵盆」が近づく、町内の人たちは、お地蔵さんを祠から出して、新たに彩色する「お化粧」を行い、新しい前掛けを着せる。

・供物などの飾り付け

町内の人たちからお供えを集め、お地蔵さんを祀る祭壇に花や供物、お札などを飾り付ける。

供物としては、紅白の餅や落雁（白雪糕）といった菓子、果物、精進物のお膳などが供えられる。

・会場の様子

会場まわりは灯籠や行燈、提灯などで飾られる。子供が生まれると、健やかな成長を願ってその子の名前を書いた提灯が作られ、その子が「地蔵盆」に参加しているあいだ毎年飾られる。

・仏事的な伝統行事

「地蔵盆」は、僧侶による読経や法話が始まるころが多い。町内によっては、子供たちが直径2㍍

3メートルの大きな数珠を囲んで座り、大人もその輪に加わりながら僧侶の読経にあわせて順々に回す「数珠まわし」(百万遍念仏の一種で、「数珠繰り」ともいう。)が行われる。また、長老が御詠歌を歌う、あるいはカセットテープで流す。

その他、伝統的な行事だけでなく、お菓子の配布やゲーム大会、スイカ割りなど、子供を主体とした様々な行事が行われる。

・つくりものなど

日用品を使って人形などをつくり、その年の話題や、物語の主人公、または情景をしつらえるなどの「つくりもの」を毎年つくることを主な行事としているところがある。

・お菓子配り

子供たちが喜ぶお菓子配りは、ほとんどの「地藏盆」で行われている。最近では、スーパ―などで地藏盆のお菓子セットが販売され、それらを振舞う流れになっているところもある。

・飲食物の振舞い

お菓子配りのほか、昼食あるいは夕食として町内の世話役によるカレーライスやうどんなどの軽食が振舞われる。また、焼きそば、綿菓子、ポップコーン、生ビールなどの屋台が設けられるところもある。

・福引き

子供にとって最も楽しく気持ちがあがる福引きは、主にプログラムの終盤に行われる。中でも「畚くわおろし」といった昔ながらの形式で行うところもある。「畚」とはかごのこと、くじで当たった景品

をかごに入れて、家の二階などの高所から吊り降ろすものだが、最近ではほぼ見られなくなったという。

・供物のお下がり

お菓子などの供物は、お下がりとして子供たちに配布される。夏の終わりに体力を消耗した子供たちの栄養を補給しようと落雁を配ったともいわれている。

・イベント

ゲーム大会など子供向けの行事がプログラムに並ぶ。夜になると花火大会や盆踊り、映画会などが行われるところもある。また、最近では特に大人だけの交流の場がもたれるところもあり、町内における貴重なコミュニケーションの機会ともなっている。

「地藏盆」が終わると、祠から移動させたお地藏さんはもとの場所に戻る。

これらは、京都の地藏盆の一般的な内容に加えて、滋賀県での筆者の聞き取りによるものも加えたものであるが、各町内で行われる地藏盆は、それぞれ内容が微妙に違っていることも特徴であるといえる。

概ね行われる要素は重なるが、様々なイベントの内容や供物の種類、参加者の人数規模や年齢層、盛り上がりなどの雰囲気も町内によって全く違っているといつて良い。

しかしながら、一つほぼ共通しているものは、当たり前前のことかもしれないが、地藏石仏を中心として行われていることである。

次項では、地藏盆になくはならない地藏石仏について述べてみたい。

(二) 地藏石仏の正体と地藏信仰の広がり 石造地藏菩薩は小型阿弥陀如来

「講」や各種の祭りなど地縁で結ばれた人々による民間信仰の偶像(礼拝の対象となるもの)については、掛け軸や、札、木造の仏像、神像、自然石や樹木、そして石造仏などがある。今回取り上げている地藏盆という行事に登場する偶像は、一部を除き、ほとんどが石造りの地藏菩薩である。

なぜ、石造地藏菩薩なのであろうか。

滋賀県の郷土史家瀬川欣一は、その著書『近江石のほとけたち』(かもがわ出版 一九九四年)において興味深い見解を述べている。現在、我々が地藏盆で礼拝する「石のお地藏さん」と呼ばれる石造地藏菩薩の大半は、阿弥陀如来の坐像であるという。筆者も以前、お地藏さんといわれる石仏を拝ませ

ていただき、

前掛けの下を覗かせてもらうと、確かに坐像であり、足の上に前で手を組んで来迎印を結んでいるのを確認したことがある。地藏菩薩の基本形は立像で、右手に



写真1 大津市仰木の地藏石仏
よく見ると阿弥陀石仏であることがわかる



写真3 大津市今堅田の地蔵盆
多くの石仏を所有する個人宅 お供えも多い



写真2 大津市仰木の地蔵石仏

錫杖を、左手には宝珠を持っているが、その姿ではなかった。

瀬川によると、一般に「石のお地藏さん」と呼ばれている仏像は、鎌倉時代の後期ごろから、室町時代の末期にかけての二五〇年ほどの間に、庶民が先祖供養のために墓石として造立した小型阿弥陀石仏であるという。

中世の庶民は、当時は火葬が主であったようであるが、そのお骨を埋葬した墓の上に、魂が極楽浄土へ生まれ変わるようにという浄土思想から、像高数十センチの阿弥陀石仏と一石五輪塔を添えて置いたのだという。石仏を購入できない貧しい庶民は木片に五輪塔と阿弥陀仏を描いたかもしれないが、それは腐敗してしまい現在確認することはできない。次にその阿弥陀石仏が、なぜ地藏菩薩として礼拝されるようになったのかという疑問が湧いてくる。

大地を自分の蔵とする地藏菩薩

その答えは、十一世紀に園城寺（三井寺）の僧実睿が撰した仏教説話『地藏菩薩霊験記』に見ることができる。

「大地は鉱石や作物、樹木などあらゆる宝を生み出して、決してその働きは尽きることがない。同じように地藏菩薩は無限の功德を生み出し、衆生を救って、そのはたらきが決して尽きることがない。だから地と名付けられる。また、蔵とは貯えて積むという意味である。世間で蔵の

中に財宝や穀物を貯えて、尽きることなく大慈悲の教で導き、衆生の煩惱の苦を除き、仏心の萌芽を成長させる。そこで蔵と名付けられる」

この論考の第一章の冒頭で紹介しているが、「地藏」という名前は、サンスクリット語でクシティ・ガルパといい、クシティが「土地、大地」、ガルパは「胎、蔵」という意味があり、地藏とは「大地を自分の蔵として、その大地に眠る素晴らしい財宝を持つて衆生を救う」菩薩であるという。

中世に、墓標として盛んにつくられた小型阿弥陀石仏群が、やがて災害等で地中に埋まり、近世に地藏信仰が民間に広がりはじめたとき、地中から掘り出され、あるいは半分地中に埋まった阿弥陀石仏を、地中（地の蔵）という別世界から現れた仏、すなわち地藏石仏であると考え、それに化粧をして、祀りはじめたのが地藏信仰の起源であり、やがてはその石仏をもとに地藏祭り、地藏盆へとつながっていったと考えることができる。

特に近江は室町時代中期に、一向宗と呼ばれた浄土真宗の布教活動が活発で、浄土真宗の門徒になる者が急増した。浄土真宗では、阿弥陀浄土の思想を中心とし、魂の救済を最も大切にしたため、墓石をもとにした先祖崇拝を軽視したといわれる。その結果として、門徒は墓を持たなくなり、これまでの墓も荒廃していったと考えられている。したがって、それまで墓石となっていた多くの阿弥陀石仏が、地中に埋もれていったのである。

(三) 地藏信仰のはじまりと広がり

「石のお地藏さん」と呼ばれる石仏の大半が小型阿弥陀石仏であり、江戸時代の地藏信仰の広がりとともに、掘り出された路傍の石仏(阿弥陀石仏)が「石のお地藏さん」となって町内や集落の辻や道端に祠が建てられ、丁寧に祀られるようになったという流れが理解できた。しかし、そのような地藏信仰自体がどのように民衆に広がっていったのだろうか。ここでは、その広がりの様子を紐解いてみたい。

六道の全てに配置され衆生を救ってくれる地藏菩薩

日本における地藏信仰のはじまりは、平安時代に遡る。釈迦の入滅後、一五〇〇年が経つと、末法の世の中となり、釈迦の教えが無くなり暗黒の世界が広がると考えられてきた。その末法の世が訪れるのが、平安時代中期の永承七年(一〇五二)であるとされ、比叡山横川の高僧恵心僧都源信によって、来世は極楽浄土に生まれかわろうと阿弥陀如来を信仰する浄土思想が積極的に貴族など知識人の間で展開された。その一方で、庶民に対しては、地獄の閻魔王と地藏菩薩が一体であるという信仰や、魂が転生する「地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天」の六道すべてに地藏菩薩が存在して、そこに落ちた魂を救うという考え方が広がった。皇族や貴族と違って一般庶民は仏教でいう作善(読経や作仏、写経、布施などを行って徳を積むこと)ができないため、極楽浄土へ行くことはできず、地獄を含めた六道の冥界を彷徨わなければならないとされていた。した

がって、生前から、地藏菩薩を信仰して、地獄に落ちても救ってもらおうという考え方が広まっていた。これが地藏信仰のはじまりといつて間違いない^{註4}。平安時代から鎌倉時代にかけて、徐々に民衆に広がりを見せるのであるが、室町時代に入ると一挙に民衆の隅々にまで地藏信仰が知られるようになる。

中世における地藏和讃の流行

そのきっかけの一つが、「地藏和讃」の流行である。和讃とは、いわゆる仏教的な内容を歌った歌謡である。その地藏和讃の冒頭と内容を以下に紹介する。

西の河原の地藏和讃の一部

帰命頂礼地藏尊 これはこの世の事ならず

死出の山路の裾野なる 西の河原の物語

聞くにつけても哀れなり この世に生まれし甲斐もなく

・・・

西の河原の地藏和讃の内容

「幼くして亡くなった子供たちは、いったん賽(さい・西・西院)の河原に集まって、幼いために、これまで徳を積むことができていないので、河原で涙を流しながら石を積んで、お父さんのため、お母さんのため、兄弟のためと積んでいく。そこに地獄の獄卒(鬼)が現れ、ここを娑婆と思って甘えるなど石積みを蹴散らす。

幼子たちは、あまりの悲しみに涙を流し許しを乞うと、そこに地藏菩薩が現れ、今日より後は我こそを冥土の親と思いなさいといつて幼子を抱きかかえ、哀れんでくれる。」

現代の我々であっても目頭が熱くなるような話であるが、この内容の和讃が、単調な二節を繰り返して室町時代の中期以降に人々に歌われた。乳幼児や幼児の死亡率が高かった当時、母親たちがこの和讃を感動の心持ちで聴き、悲哀に満ちた心が救われたと容易に推測できる。おそらく、女性の大半が、この悲しみを背負っていたと考えられ、地藏和讃の救いは、そういう意味で、急速に広がっていたのであろう。

郷土史家瀬川欣一は、その著書『近江 石のほとけたち』において、地藏和讃が流行して五〇〇年間、愛する我が子を次から次へと無くした母親たちは、賽の河原の物語を我が子の苦しみとして受け止め、死んだ子の乳の匂いと唾液の染み込んだよだれ前掛けの匂いを地藏菩薩に嗅いでもらい、「この匂いの子が賽の河原にあります。どうぞこの匂いがある我が子を、大勢の幼子とともに救うてくださるようお願いします」と一心不乱に祈り続けたと想像している。

以上のように、地藏菩薩が、六道のすべての世界、特に地獄に落ちた亡者を唯一救ってくれる菩薩であるからこそ生前に礼拝するということにはじまり、地藏和讃に歌われた幼子を救ってくれるのが地藏菩

薩であるということを含め、中世半ば以降、地藏菩薩に対する庶民の信仰が爆発的に支持された。それだけでなく、六十六部回國巡礼や修験道との結びつきなども全国に地藏信仰が広がるきっかけとなったという。

そして、地中から現れた（掘り起こされた）地藏石仏をよりどころとして、地藏講、地藏祭りから地藏盆という行事とともに地藏信仰が地域に定着していったと考えられるのである。

第三章 現代における地藏盆

（一）地藏盆の歴史と今

村上紀夫著『京都地藏盆の歴史』第四章「近代の地藏会」によると、明治の初めに一旦地藏会や地藏祭りなどの行事や石仏が町から消え、そして明治十六年（一八八三）に復活。その時期から京都で「地藏盆」という名称が使われはじめたというのである。

経緯を一部紹介したい。明治四年（一八七一）に一つの布達が京都府から出されたという。内容は、町内に存在する大日如来や地藏菩薩の石仏や堂、祠を撤去するか、地域の小学校へ納めるなどの処置を行い、祭りや集会なども行わないようにというものであった。明治五年（一八七二）にも、精霊迎えや施餓鬼、六斎念仏などの盆行事を禁止する布達も出されている。京都府以外でも滋賀県、兵庫県、大阪府に類する布達がこの前後の年に出されているという記録がある。これは、明治政府の神道国教化の方

針に従って発布された神仏分離令の一環であると考えられるが、近世以降盛んに行われてきた町の行事である地藏会や地藏祭り、そして盆行事までもが、古く悪しき慣習であり、そのような行事に金銭や労力を使うのではなく、新しい国家をつくるために知恵を絞って邁進するようにとし、すべてを廃止すべきとなった。当時、大きな権力を持つて改革を断行した横村正直京都府知事による現在では考えられない命令が出された。しかし、当時の新聞の記事や、寺院や町内の文書によると、その命令に皆が従ったわけではなく、一時は、地藏石仏や、祠などが撤去されたが、その後徐々に各所で復活し、実施されている姿も見られ、警察などによる厳しい取り締まりは行われなかったという。そして、明治十六年に、「任他主義（そこで起こっている事実を重要視し、事の成り行きに任せるという）」で知られる北垣国道知事が、明治五年の布達を取り消すという布達を出したのである。

その年の八月十九日の「京都滋賀新報」^{〔註5〕}の「地藏盆」と題された記事によると、地藏盆と呼ばれる八月二十二日、二十三日、二十四日の三日間に地域で賑やかに飾り付けが行われる行事が、横村知事によって禁止されたが、今年布達によって解禁され、今年は盛大に行おうと各町内で盛り上がりつつある様子が見える。一方で不景気の中、費用がかさみ、家庭によっては困っているという声も聞くという内容となっている。

ここで重要なことは、この新聞記事に「地藏盆」

と表現されていることである。京都府が発する布達の内容と、「地藏盆」という言葉が、この記事に見られることによって、より多くの町内が復活に向けて動き出したと考えられ、また、この京都府の動きに滋賀県を含む近隣の府県も同調し、「地藏盆」という名称の行事として復活していったと考えられるのである。

中世から広がった地藏信仰は、近世に入ると地藏会や地藏祭りとして、夏の子供の祭りとして年中行事の一つに定着する。そして近代に入り、明治維新の政策によって一旦途絶えたが、明治十六年に、京都を中心とした「地藏盆」という名前で復活し、現代に至っている。地藏盆という行事は、魂の救いを求めた純粹な信仰が根底にあったと想像できるが、近代を経て、現代に入ると、水子供養や魍魎の進入、六道の救済などの信仰心は薄れ、子供たちのための楽しい夏祭りへと変化していくのである。

筆者は、これまでにいくつかの現代の近江における地藏盆を取材した。大津市今堅田に見られる地藏講と地藏めぐり^{〔註6〕}、大津市仰木辻ヶ下の地藏盆^{〔註7〕}、東近江市勝堂町の千体地藏堂における地藏講^{〔註8〕}、大津市比叡辻の千体地藏堂の地藏盆^{〔註9〕}などである。

今回は新たに、近江八幡の現在の地藏盆の姿を取材したので、次項でその詳細を述べてみたい。

（二）近江八幡の地藏盆

今回、近江八幡市の旧市街地における地藏盆の現

在の様子を取材する機会があったので、以下にその報告をしたい。

①近江八幡市永原町上（二〇二二年十月二十六日）

取材に応じていただいた方々…山本有司氏、山本敏雄氏、高嶋道夫氏、伊寄敏氏、本間繁利氏
町内の規模・開催日

町内の戸数は江戸期が最盛期であったというが、四十二戸という記録がある。現在は二十二戸。ほとんどの家は、夫婦二名が一人暮らしで、小学生の子供は居ない。

地蔵盆の開催日は曜日を問わず、七月二十三日、二十四日の二日間。かつては夜通し行っていたが、現在は昼間と夜のみ。

過去の地蔵盆

明治維新の廃仏毀釈の際に、地蔵石仏を琵琶湖に捨てたという伝説がある。

三十年から四十年前は、多くの子供（四十名ほどいたと思う）が参加し、子供たちの楽しい夏祭りであった。各家をお地蔵さんが移動して、毎年違う家で行われた。自分たちが子供の頃、大きな町家が当番だった年に、蔵も含めて家の中を探検するのが面白かった。お地蔵様のお供物は子供の食べ物、お菓子が中心で、お下がり配った。御華足（丸餅が積まれている）と呼ばれるお供物の印象が強い。また、御膳当番と呼ばれる人がその準備をする。全体の段取りは一年の輪番である町内会長が仕切る。子供たちと大人も一緒になって、お経を聴きながら大きな



写真5 永原町上の取材の様子



写真4 永原町上の地蔵尊 永原町上提供

数珠を回す百万遍数珠練りが行われていた。年齢を超えた交流が良かった。大人と子供がその日は心を開いたかたちでコミュニケーションが展開する良い時間であった。

縄手町の地蔵盆は露店やつくりものなどが出て盛大に行われることで知られている。

現在の地蔵盆

現在は、完全に大人の祭りになっている。お地蔵さんの前で読経はするが、その後のナオライが中心になっている。数年前までは食べ物を持ち寄っていたが、最近は町内会の会費で賄っている。家族が寄り合う良い機会となっている。

コロナ禍とこれからの地蔵盆

コロナ禍において、三年間行事は中止。読経などの仏事的なことは行った。一気には戻らないと思うが、徐々に地蔵盆はもとに戻っていくと思う。

お地蔵さんは心のよりどころである。毎日お水やお花が絶えない。この文化は無くならない。三十年後はほとんどが空き家になってしまうのではないかと、五軒でも残れば、お地蔵さんは守っている。

②近江八幡市出町地区（二〇二二年十二月十五日）

取材に応じていただいた方々…川崎勇氏、森谷伸子氏、岡村益夫氏

町内の規模・開催日

近江八幡市出町二丁目目は現在二十戸。子供は四人のみ。地蔵盆の時には他家に嫁いだ娘の子供（外孫）



写真7 出町地区の取材の様子2



写真6 出町地区の取材の様子1



写真9 出町地区の地藏盆の様子2 岡村益夫氏提供



写真8 出町地区の地藏盆の様子1 岡村益夫氏提供

が帰ってきて参加するので、少し賑やかになる。開催日は商店街という特徴から、月末を避け、八月三日と四日の二日間。今は八月の第一週の土日となっている。

過去の地藏盆

お地藏さんは、天台宗安楽律院の末寺である東福寺に安置されている。現在は無住となっている。

地藏盆は小学校六年生までの子供が対象となっている。地藏盆の日には子供の名前を書いた提灯を飾る。当日は、近くの寺院の僧侶をお願いして読経してもらう。読経の中、百万遍数珠練りが行われる。この大きな数珠は、森谷さん宅で不動さんの縁日に講の人たちが寄って数珠練りをしていたので、それを地藏盆で使わせてもらっている。

我々が子供の頃は、年長のお兄さんやお姉さんに遊びや勉強を教えてもらった懐かしい記憶がある。
現在の地藏盆とこれから

一年で交代する町内会長が地藏盆全体の段取りを仕切る。出町二丁目には、新年会と並んで、地藏盆は夏の懇親会となっている。将来的には大人の地藏盆にしようかという声もあがっている。懇親会の大切さをみんなが理解している。特にコロナ禍で、群れることがなくなった。今後地藏盆などの町内の行事が大切になるのでは。この町内には新しい住宅も建ちはじめていますので、新規に町内会に加入してもらい、地藏盆にも参加して欲しいと思っている。現在の町内会長の岡村さんは、八幡小学校区（一区から二十区ある）のまちづくり協議会の会長を務めら

れている。小学校区全体のことも考えると町内会という地域社会の活性化、防災のことなども含め、様々な課題を抱えている。改めて考えると地蔵盆のような地域の行事をつなぎ続けていかなければならないと強く思っている。

③ 近江八幡市為心町中（二〇二二年十二月十五日）

取材に応じていただいた方々…佐々木常雄氏、五十子英雄氏、川部清氏、高田浩次氏

町内の規模・開催日

為心町は「上」「中」「元」の三つの地域に分かれ、「上」が四十五戸、「元」が八戸、そして「中」が十三戸とそれぞれ地域の規模が違っている。最近空き家が増えた「中」地区も最盛期には二十戸を数えていたという。日程は、八月二十三日の一日のみ実施する。

過去の地蔵盆

この地域のお地藏さんは、小さな厨子に入った木造の延命地藏尊で、元々この地区にはお地藏さんはなかったのだが、六十年ほど前に、地藏菩薩が「ここに帰りたい」といったという町内にお告げのようなものがあり、元々個人の持ち物であった延命地藏尊を為心町中の町内の地藏尊として安置したと聞いている。

地藏盆は子供の祭りであり、子供の成長を願う祈りがある。

三十年ほど前、我々の子供たちが参加していた頃は、左義長の山車をつくる費用を稼ぐために、焼き



写真 11 為心町中の地蔵盆法要の様子



写真 10 為心町中の取材の様子

そばやビールなどの飲食物を販売したり、パチンコ台を借りてきて、パチンコで楽しんだりしていた。楽しい思い出がある。盆踊りも盛大に行っていた。
現在の地蔵盆とこれから

現在町内に子供は居ない。大人の夏祭りとなっているのが現状である。

当日は、浄土宗浄福寺の僧侶に読経をお願いしている。提灯に絵を書いて吊したり、子供の名前が書いてある提灯を吊す。外孫でも孫ができれば提灯をつくっている。

朝十一時から飾り付けをし、十四時に僧侶のお参り、御詠歌（カセットテープで流す）、数珠繰り（十年前に古道具屋で購入）、夕方後片付けの後、懇親会という流れ。

お地藏さんの当番があり、毎朝、お水とお茶とお線香、お花は絶やしたことがない。毎月、十五日と三十日に当番と次の当番の家で道具の引き継ぎが行われる。当番になれば、十五日間毎朝お地藏さんのお世話をする。これは、させてもらうという気持ちでみんなお世話をしている。当番だけでなく、町内の人全員が、毎日祠に拝む習慣がある。

また、お正月には元日の十時に全員が約五分間ほどであるが、集まって挨拶をするという恒例の行事がある。また、この町内は、三月の近江八幡の左義長祭りに、毎年左義長の山車を出すことになっており、結束が非常に強い。

お地藏さんを祀ることと地蔵盆という行事は決して無くしてはいけなしいし、無くなることはないと思う。

近江八幡の旧市街地の三つの町内の地蔵盆を取材したが、町内の規模、地蔵盆が行われる日程、開催場所、お地蔵さんの形態や素材、伝説などそれぞれ違っていた。共通するところは、地蔵盆が元来、子供の夏祭りであること、かつては子供がたくさんいて盛り上がったが、現在はほとんど子供の姿が無く、大人のための祭りになっている。

そして、町内の懇親、親睦会としての役割があることや、貴重なコミュニケーションの機会となっていること、そして地蔵菩薩が心のよりどころとなっていることと、この行事を無くしてはいけないう、無くなることはないだろうという熱い思いがあったことが共通していた。

このことは、最終項でまとめたいが、貴重な取材ができたと考えている。筆者が、これ以外の近江における地蔵盆や地蔵講、そして地蔵信仰を取材した時の印象と全く同じものであった。

おわりに 最小単位的地縁コミュニティ――

現代の地蔵盆の様子を垣間見て感じたことは、子供の祭りである地蔵盆が、主人公（子供）の減少によって規模が小さくなり、また、支える人々の高齢化から、その継続も危ぶまれているという現状である。しかし、筆者が聞き取りをした町内では、この行事が現代社会において二つの重要な要素を内包していることがわかった。

一つは、信仰として町内の心のよりどころとなっ

ていることである。大まかな括りで見ると地蔵盆は仏事である。読経があり、百万遍数珠練りが行われる。しかし、地蔵菩薩という仏様が、仏教説話や伝説で語られているように、庶民の身近に存在して、地獄に落ちても救ってくれるという絶対的な救済者であり、無限の包容力を備えている。個人の生老病死という悩みや、苦しみを聞いてくれたり、火の神の側面もあり、町内全体の安全も見守ってくれているという万能的な仏様なのである。病を患い、今後どうになるか、医師に頼るしかないが、先が見えないどうしようもない不安を和らげてくれるのは、これまでも守ってくれた、町内のお地蔵さんである。もちろん、お地蔵さんが病を治してくれるわけでないことは理解していても、何かにすがり、小さくても光が見えるような支えがあることに心が救われるのである。すなわち心のよりどころという存在なのである。このことは、どの地域のお地蔵さんに対しても共通して語られていた。

二つ目は、地域コミュニティの場であるということである。

かつて、地蔵盆は、おじいさんおばあさん、お父さんお母さん、そして子供たちという親子三代が集まる行事であった。子供の祭りだということが、大人の結束にもつながっていたようである。大人たちにとって、子供の成長を見る機会が、最も幸せを感じる時間であるといえる。普段は家の中の大人との交流であるが、この日に限っては、他の家の大人とも交流する。大人たちも子供の友達や、その中で

遊ぶ我が子の姿を見る。子供たちも学校では同級生との関わりが多いが、この時ばかりは、先輩や後輩との交流がある。遊びや勉強を教えてもらいう絶好の機会となっていたという思い出を聞いた。

現代に至っては、地蔵盆における子供の存在がほぼ無くなりつつあるということであったが、大人のためのナオライ、すなわち懇親会は重要で、大人の祭りになっているとの声もあった。普段ゆっくり話すことがない近所の家族との交流が大切であるという認識は、どの地蔵盆でも見られた。

道路整備、上下水道、電気、ガス、ゴミ収集、教育、福祉などのインフラシステムは、現代に至って完全に行き届き、便利で快適になった。近世はそれらをすべて地域の人々が協力して行ってきたため、地縁のつながりは必然的なものであった。しかし、現代はすべて行政サービスの中で専門的に行われるため、必然的に地域の人々が協力することが無くなってしまった。もちろん、地域の運動会や文化祭などのイベントがその部分を担っているわけであるが、必然性が薄いため、参加者も限られている現状がある。

地蔵盆という行事は、年に一度であるが、お地蔵さんという絶対的な存在を中心として、町内においては参加しなくてはならない行事の一つとなっている。今年は都合悪いので参加しませんというようなことではない。そういう意味において、地蔵盆という行事は、最小単位の深く濃い地縁コミュニティの場であるといえると考えている。

地域における子供の見守り、高齢者の一人暮らし、防災、そしてコロナ禍を経て、他の人との関わりの大切さ(利他)が浮き彫りになってきた。そういう意味において、地藏盆のような行事の存在は、今も一度見直さなければならぬ時にきていると感じる。大切であると認識しながらも地藏盆を実際に継続するためには、地域ごとに様々な課題がある。地藏盆に限らず、地縁のコミュニティをつなぐ場の必要性は、今後見逃すことができない重要事項となっていくはずである。

註

1. 「十王経」には、中国で先述された「仏説預修十王生七経」と、日本で作成された「仏説地藏菩薩発心因縁十王経」がある。「仏説預修十王生七経」には人は死後に冥土で十人の冥界の王から裁きを受けなければならないが、その苦しみから逃れるために生前予め供養しておく方法が記されている。ここには特に地藏菩薩の靈驗について記されていないが、日本で作成された「仏説地藏菩薩発心因縁十王経」には、冥界の各王に地藏菩薩を含む仏教の菩薩や如来が当てられ、鎌倉時代には三仏が追加されて十三仏としての信仰に発展する。ここでは、地藏菩薩が閻羅王と習合しており、地獄に落ちた衆生を救ってくれる地藏菩薩の靈驗が書かれている。詳細は、加藤賢治著「下仰木の『十王堂』―地域のお堂が果たす役割―」(『成安造形大学附属近江学研究紀要』第十一号 二〇二二年)に記している。
2. 「三十日秘仏」二十四日の地藏菩薩をはじめ、十八日の観音菩薩、二十八日の不動明王など、各仏の縁日として知られている。
3. 洛中(京都の市中)の浄土宗寺院の名鑑。全八巻四冊。

もともと洛中の寺院を前集として刊行し、洛外の寺院を後集にまとめて出版する予定だったが、後集が刊行された形跡はない。

4. 地藏信仰のはじまりについては、加藤賢治著「里山の民間信仰―仰木の地藏信仰について」(『成安造形大学附属近江学研究紀要』第七号 二〇一八年)に詳しく紹介されている。

5. 現京都新聞。現在も京都府と滋賀県の一部(特に大津市や湖西、湖南地区)を範囲としている。当時も今も事件事故に加え地域の文化を伝える役割を担っている。当時は特に記事が府民や県民に大きな影響を与えていたと考えられる。

6. 「古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開されるコミュニティ」大津市今堅田一丁目の愛宕講と地藏講を中心に、加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第三号 二〇一四年

7. 「里山の民間信仰―仰木の地藏信仰について―」加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第七号 二〇一八年

8. 「土人形の魅力 東近江の小幡人形を訪ねて」加藤賢治 文化誌『近江学』第七号 成安造形大学附属近江学研究 二〇一五年

9. 「下阪本のお地藏さん」加藤賢治「湖都の文学」大津市文化祭実行委員会 二〇二二年

参考文献

- ・田中久夫『地藏信仰と民俗』岩田書院 一九九五年
- ・速水侑「源信」吉川弘文館 一九八八年
- ・速水侑「日本古代貴族社会における地藏信仰の展開」北海道大学文学部紀要 一九六九年
- ・速水侑『地藏信仰』塙新書 一九七五年

・眞鍋廣済『地藏菩薩の研究』三密堂書店 一九六〇年

・『日本古典文学全集 今昔物語集 二二 小学館 一九七二年

・村上紀夫『京都地藏盆の歴史』法蔵館 二〇一七年

・下泉全曉『地藏菩薩 地獄を救う路傍のほとけ』春秋社 二〇一五年

・五来重『石の宗教』角川選書 一九八八年

・林英一『地藏盆―受容と展開の様式―』初芝文庫 一九九七年

・瀬川欣一『近江 石のほとけたち』かもがわ出版 一九九四年

・「古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開されるコミュニティ」大津市今堅田一丁目の愛宕講と地藏講を中心に、加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第三号 二〇一四年
https://onigaku.org/fundamental/wp-content/uploads/2022/03/kiyou3_06_kato.pdf

・「里山の民間信仰―仰木の地藏信仰について―」加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第七号 二〇一八年
https://onigaku.org/fundamental/wp-content/uploads/2022/03/kiyou3_03_kato.pdf

・「下仰木の十王堂―地域のお堂が果たす役割―」加藤賢治「成安造形大学附属近江学研究紀要」第十一号 二〇二二年
https://onigaku.org/fundamental/wp-content/uploads/2022/03/kiyou11_04_kato.pdf

・「土人形の魅力 東近江の小幡人形を訪ねて」加藤賢治 文化誌『近江学』第七号 成安造形大学附属近江学研究 二〇一五年

・「下阪本のお地藏さん」加藤賢治「湖都の文学」大津市文化祭実行委員会 二〇二二年

近江の懷をめぐる 6

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員

石川

亮

近江の懷をめぐる 6

美術家／成安造形大学准教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員 石川 亮

Name:

ISHIKAWA Ryo

Title:

Omi's "Futokoro": Part Six

Summary:

Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine "techniques" and their "spirit" in order to answer the questions, "Why have these particular techniques been preserved and passed down?" and "What special value were they perceived to encompass?" I will also look at why these examples are so limited.

「近江の懷」とは、近江（滋賀県）という風土に根を下ろして未来社会へ向けてものづくりや新たなライフスタイルや伝統の継承などを実践し発信している人々と、それらを育む近江ならではの風土や地域社会のつながりの場である。「命の水の周辺にある暮らしの中に生きづく生業」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当て、主に近江の主要な街道沿いにある宿場町や門前町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すことを心がけている。

二〇一六年十二月より滋賀県文化振興事業団（二〇一七年四月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に「近江の懷」と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につながる新たな価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。二〇二三年一月現在まで二回の連載が継続されており、二〇二二年一月より二〇二二年十月までの第二十回から第二三回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。

はじめに

六回目となる「近江の懷をめぐる」研究活動は

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の感染拡大が始まってから四年目を迎えている。マスク装着でのロードバイクによるフィールドワークはすっかりライフスタイルとなった。筆者がこの文書をまとめる二〇二三年一月、行動制限のないお正月を三年ぶりに迎え、ウィズコロナ社会に入っているものの、全国の感染者数は合計三〇〇〇万人を超えている。新型コロナウイルスとの共生がまだまだ続くことは誰もが了解せざるを得ない状況である。

二〇二二年は如何にしてその「禍」と共生し、新たな暮らし方を見出して持続していくか、それを具体的に実行している人々に焦点を当てることになった。

始めは東海道石部宿、二〇一七年から活動してきた東海道統一案内看板設置で縁ができた湖南市に位置する石部宿へのライド取材から始まる。そこで地域おこし協力隊の仕組みを使って移住し、石部景観まちづくり検討会に属して協力を得ながら、新たな「なりわい」をスタートさせた三組のクリエイターのライフスタイルに注目した。次に琵琶湖の東岸、ビワイチルートに指定されているさざなみ街道沿いの大藪の集落より、祖父母が住んでいた土地に移住してシャッブづくりをするクラフトマンを訪問した。そして中山道と八風街道の分岐点である武佐の地に

新たなパン工房と店舗をスタートさせたパン職人のスタンスに焦点を当てた。これまで日本各地で培ってきた様々なパンづくりの経験を活かし、地元の食材を使用し、地域の人々へ向けたパンづくりで新たな食文化を伝えていく。最後に湖西のビワイチルートと重なる北国海道（西近江路）沿いでスポーツ自転車店を営む自転車技師の活動を追った。今日のビワイチ推進活動の積み上げに尽力しつつ、自転車による新たなコミュニティとライフスタイルを広げている。

彼らに共通するのは、偶然であるが近世から続く街道沿いに仕事場を構え、今日社会の様々な仕組みを上手く使いながら新たな「なりわい」を立ち上げている点である。そして原料調達、製造、製品管理、営業、販売などこれまで分業化されていた仕事の大半を自身で行い、自らマネージメントしているところである。またこれまで積み上げてきた仕事の経験を活かし自らの手で「新たな城（仕事場）」を築き、「やりたいこと」を「なりわい」として軌道にのせているところである。前回の「近江の懷をめぐる五」同様、自転車でのアプローチでなければ出会えなかった場所に拠点を構え、コロナ禍を契機にライフスタイルを見直し、既に一歩二歩と踏み出している四地域六者をみていきたい。

一、石部の三軒

「京立ち、石部泊まり」で知られる東海道石部宿は、

歌川広重の浮世絵でも表現されるように田楽茶屋が象徴的に描かれている。茶屋は旅人と地元の人々が情報交流するコミュニティスペースと言える。

二〇二〇年秋、湖南省石部学区まちづくり協議会の依頼を受け、二〇一七年より大津と草津で始まった東海道統一案内看板設置の相談と、それに合わせた「石部宿オリジナル看板」作成依頼を受けた。二〇二一年春、田楽茶屋をイメージしたロゴマークが完成し、街角サロン「いしべ宿驛」に設置したのは記憶に新しい。この縁から湖南省地域おこし協力隊の活動を知り、民家を有効活用する創造的な活動を知ることになる。

ここで湖南省の地域おこし協力隊の仕組みについてであるが、NCL (Next Commons Lab) という全国でネットワークを展開する組織と一緒に取り組まれてきたことが特異性としてあげられる。双方のやりたいことを調整しつつ活動しているNCLを紹介して立ち上がった新たな施設三軒に焦点を当てたい。

・name Co. (ナメロー・豆講)

一軒目はname Co.だ。ここに仕掛けの張本人、NCLメンバーでありながら地域おこし協力隊であり、看板制作で出会ったまちづくり協議会のメンバーでもある長砂伸也さんがいる。name Co.は私設公民館であり、塾、カフェでもある。名前についてだが、この地域で古くから小さな寄り合いを豆講とよび、今もその文化が残っていることが由来であ

る。この場で地域の人々がやりたいことを介して交流できる。さらには小中高生たちの居場所が少ないことから、この場づくりが始まっている。もともとあった店舗の電飾看板や外壁を活かしながら最小限のリノベーションをしているところも工夫に富んでいる面白。お話を伺うと豆には二つの形があるとのこと、一つは腎臓型のビーン、もう一つは丸型のビーであり、それがCとOに見えることからロゴマークをOで表している。中に入ると壁材と天井材が外され柱が剥き出しになっている。格子状に見える部位は棚や商品を展示しやすくてDIY仕様になっている。壁に目をやると変形した計量容器が見えた。それは地域の子供と揚げ物をつくるワークショップを行った時、フライパンに残った油を他の容器に移し替えようとして、その容器に入れたところ、瞬間にプラスチックが変形した。この時「アウト！」と子供が叫んだことから「アウトなアート」と名付け展示することにしたそうだ。他にもママ友が集う場として子供服の交換会場となっており地域の方々が集う場となっている。

・DONGREE BOOKS & STORY CAFE

二軒目はブックアンドカフェのドングリーだ。石部宿西縄手から東へ、クランクの二つ目の角の奥に吉御子神社が鎮座しているがその手前にお店は位置している。民家の玄関には古い煉瓦と白い扉、鹿の角のドアノブで迎えてくれる。初めてお伺いしたのは二〇二〇年十二月、東海道統一案内看板でまちづ

くり協議会に出席する際に訪問した。カフェオーブンを目前に開店準備の時である。様々な色、材料、形の床材がパッチワークされている。店内には木製丸テーブルがいくつか配置され、形の違う椅子がおさめられていた。店主のドリーさんが「地域の方々と一緒に作ったんです！」話されていたことを覚えている。改めて二〇二二年、年明けに取材するとお客さんで賑わっており、お店を目的に来店されていることが伝わってくる。店内にはあちこちに本棚があり、選りすぐりのクラフト作品が展示販売されていた。コーヒー焙煎も始められ、石部ブレンドと湖南ブレンドの二種が目に入ってきた。スタートは京都東山のドングリーコーヒースタンドから、さらに本を介して地域の人や起業を目指す人、未来の新たな暮らしを目指す人などが交流できる場づくりを目指し、次のステージとして石部を選ばれたそうだった。棚の本には読者が好きなページに感想や思いを葉に書き綴り、次に読む人が偶然見つけて交流を生む「葉本」という仕組みがセットされている。最後に「原始物々交換の時代の贈与（ギフト）しあうような世界観を目指したいのです」と話されていたのが印象的だった。

・まるとしかく

三軒目は東海道を東へ石部小学校近くに位置するアートスペースと一棟貸のお宿である。昭和の匂いを漂わせながらも素材に拘った空間づくりと、そこに住まう家族を紹介する。壁は天然の藁を練り込ん

だ漆喰仕上げで統一され、和室の畳縁は生成り素材に統一されている。床間は宿主の近藤洋平さんの作品が展示されている。仕切りにはミラー加工を施したガラス戸がはまり、外の風景や隣の空間が写り合って、広さと明るさを感じる空間である。二階は街道に面して大きな窓が一つあり、切り取られた空間に向いの瓦屋根が見え、東海道の風景として新鮮である。照明は裸電球のライトが柔らかく空間を照らしている。宿の機能を妨げることなく、所々に作品が展示され、ミニマリズムを思わせる空間でありながら昭和の住宅の間取りであることに驚く。洋平さんの妻、桃子さんは一階のキッチンカフェで愛娘の空ちゃんと空間を見守っている。しかし二〇二〇年のスタート早々、計画は一転した。インバウンドの旅行客に「日本の暮らし体験」をコンセプトに作られた空間はコロナ禍により模索の毎日を強いられ、空間の活用を様々な設定に変更して対応を始めている。桃子さんに実情を尋ねると、子育て奮闘中で草津の保育園へ送り迎いのための車を用立てしてくださるなど、地域の方々が様々なあり方で助けてくださっているとの返答があった。洋平さんには安土のヨシを使ったヨシ葺きの仕事が舞い込んだ。美術家だからこそできる素材を扱う仕事依頼は、「宿づくりの拘り」があることが周囲からの支え合いを結んでいる。宿名の「しかく」はドットや規則性を「まる」はご縁や柔軟性を想起させ、このバランスを成り立たせている。

コロナ禍の猛威は感染症のみならず孤立や分断を



写真5 吉御子神社近くの「DONGREE BOOKS & STORY CAFE」玄関



写真6 「DONGREE BOOKS & STORY CAFE」店内の様子



写真3 「mame Co.」の長砂伸也さん



写真4 「アウトなアート」が展示されている



写真1 いしべ宿駅に設置した看板



写真2 ロゴのあった喫茶マメコーの看板

二、大藪のシャツ屋

さざなみ街道を北上、滋賀県立大学前を過ぎたあたりから、ビワイチをするならそろそろ本気でペダ

生み、人間の精神をも蝕んでいるように思える。一方「近江の懐」には、全国の旅人を受け入れる潜在能力がある。新たに展開しようとする石部の三軒と地域の関係性に共助の精神がみえた。



写真9「まとしかく」の近藤洋平さんと桃子さん夫妻



写真10「まとしかく」の空間



写真7 某本を紹介するドリーさん



写真8 東海道沿いにある「まとしかく」

ルを踏みこむ時間になるのだが、二〇二〇年にこのあたりへ移転したシャツ屋さんのことを思い出した。すっかりコロナウイルスと共存する社会になってしまった二〇二二年四月、あらためて訪問した。犬上川を渡ると右手に旧道があらわれ、そこを進むと「大藪」と言う集落に入る。中心部には西福寺と神明神社があり近江の字の特徴を色濃く表している。その寺と神社を結ぶ中間地点に位置するのがシャツ工房兼店舗の「COMMUNE」である。コミュニティと聞いて連想するのは「共同体」やイタリアの最小自治体組織「コムーネ」である。大藪／字に位置するコミュニティ店主久米勝智さんにお話を伺った。

久米さんとの出会いは二〇一五年である。以前からシャツの生産から販売まで全てを一人でこなすクラフトマンがいることは聞いていた。当時、私は琵琶湖の淡水真珠の魅力発信に取り組むプロジェクトに携わっていた。淡水真珠をつくる池蝶貝の貝殻を活用したアイデアや製品を開発する中、その貝ボタンのついたシャツをつくってくださったことを覚えていた。その後、何度かお会いする中、店舗の移転を検討されていることも話されていた。

久米さんは地元の高校を卒業後、東京の服飾専門学校でスキルを身につけ、アパレル業界の世界を知る。その後、京都のシャツメーカーで修行を積み、その経験からシャツづくりにおける全ての仕事を身につけるため、パタンナー、お直し、印刷会社を経て二〇〇九年彦根市中心部にお店を開く。「様々な仕事に就いたが、日頃のシャツづくりは続けていた

のです。シャツづくりの疑問が見えたと解るまで突き詰める性分なのです」と、仕事の遍歴から地元で開店するまでの経緯を聞くと、意外に拘りは無く、めぐり合わせや縁が今日までの継続、持続であることがわかる。一つの職場に止まることがなかった理由に「アパレル業界のキラキラした世界の反面、どこか宙に浮いた感じが自分に合わなかった」「マーケティングや戦略が先行する感じが違和感を感じていた」と仕事の起点となる時期に大きな決断をしてきたことが現在の久米さんの立ち位置を決定付けているように思う。それでも「シャツが好き、自分の着たいシャツが作りたいたい」を忘れず「向いてる方へ、合ってる方へ」進んできたと話されるクラフトマン精神があふれる様子が印象的である。

次に数年前から計画していた移転に関してだが、なぜ大藪の地を選んだのか理由を聞くと、「実はここは祖母の家やった場所なんです。この庭で小さい頃、従兄弟と集まって遊んでたんです。さざなみ街道が整備される前はそのまま琵琶湖へ行けたんです」との答えが返ってきた。やがて祖母の家が空き家になり、近くに住む親戚と交代で掃除や整理をしている中、「この土地が他人の手に移っていくことが想像できないと自覚するようになった」と話された。更にこの時期、久米さんに新しい家族ができたことや、自分が見てきた風景に地に足を着け、好きなシャツが作れることから、この地に移転することを決断された。

一方で大藪の地域住人に聞き取りをすると毎年空

き家が増えているとのこと、ここでも高齢化は進み、進学や就職を期に子供がこの地を出ると、古い慣習に戻ることもなかなか難しいようである。実際に旧道沿いには更地となった空間が所々確認できた。

さて、このような市街地から離れた静かな場所得手づくりシャツ生産の生業が成り立つのだろうかという疑問を持つ。久米さんのシャツは素材選びからデザイン、製造、製品管理、営業、販売等々、全てを自分一人で行っている。そもそもアパレル業界はこれらを分業化して効率重視で生産販売がされてきた。シャツは誰もが一枚は持ち、年に一枚は買うものだろう。消耗品と考えるならより安価で効率が求められる。それと比べ久米さんのつくるシャツは非効率的で、全てを手作業でつくることから価格も決して安価とは言えない。

しかし、久米さんの「向いてる方へ、合ってる方へ」のスタンスを一定支持する層がいるのだ。今日のネット注文ができる仕組みも然りだが、ものづくりの姿勢の価値を共有できる催事に呼ばれ、全国のあちこちで出品されている。そこでは互いをリスペクトしあえるクラフトマンとそのファンが集い、即売が行われている。催事から仕事場に帰るといつもの風景を見ながら、つくれる分だけのシャツづくりとお直しや修理を引き受けている。大量生産、消費、廃棄とは違うところに久米さんのものづくりはあるのだろう。

大藪に移転して二年、仕事場兼住居にする為、新築となったが三角屋根に杉材の外壁は近江の風景に



写真 15 仕事を進めながら対話が始まる (久米勝智さん)



写真 13 仕事場から見える風景



写真 11 玄関、シャツの生地が迎える



写真 16 旧道沿いに溶け込む仕事場兼住居 (右)



写真 14 一着分のシャツの型紙が用意されている



写真 12 店内に並ぶシャツ



写真 17 変わらぬ風景を前に (久米さん)

溶け込んでいる。ご近所さんは既に久米さんの連絡先を知っていて、仕事場からの風景には隣の畑が入り込んでいる。地域のつながり「ゆるい境界」が心地良いようだ。

「あんまり世の中の邪魔にならん程度に作ろう」と久米さんはミシンの前で呟いた。

三、武佐の道標パン

「道標」がタイトル中に入る「近江の懐」は今回で三度目になる。あらためてその趣旨を確認するなら、街道から入り宿場町を起点としながら町の魅力やそこで萌芽する新たな動きに迫っていく。それを支える背景に焦点を当てる。すると必ずそこには歴史を見てきた道標が建っているのだ。これまで彼方此方と巡る中、中山道と八風街道が交差する武佐(近江八幡市)は行動の起点となっていた。この地に二〇二一年十一月に小さなパン店が開店したと聞きつ

けた。私ごとであるが、京都での学生時代から新しいパン店が開くとすぐ食べ、「やれ何系だ！」などと分類していた。今日も学生とフィールドワークの最中にパン店を見つけては食べ比べしている。今回は道標のある地、武佐の新しいパン店に焦点を当てる。

中山道を彦根方面へ日野川を過ぎて馬淵の集落から国道八号線と合流する。しばらく並走して西宿町の信号を右に入ると旧道に戻ってきた。伊庭貞剛邸跡地の大楠を目印に近江鉄道武佐駅を過ぎると武佐宿中心地に入る。愛宕山と記された石碑を目にし、宿場町にある火伏せの祈りを確認したところで八風街道との交差点に到着する。ここにある道標は後述するとして、右折し八日市方向へ三〇〇メートル程のところに倉庫が見える。ここが今回のパン店だ。

パン店にはその特徴を色濃く出すパンが必ずある。いまのところ迷わずそれは「明太フランス」で、国産小麦とバターのみで生地づくりをする正統派のハード系パンの店、と言って良いだろう。店主の岡田英記さんにお話を伺うことができた。

岡田さんは近江八幡市安土町出身、パン職人の道は京都から始まる。その後、大阪の茨木で見習いを始め守口にある大手スーパーチェーンに入るお店からスタートする。程なくして滋賀守山の一〇〇円パンのお店に入るが、すぐに社長命令で九州福岡に研修へ行くこととなる。ここからが岡田さんのパンづくり人生の始まりとなる。「冷凍ストックしても美味しい」をコンセプトにした箱崎九大前にある「パンストック」が研修先である。テレビ放送での紹介

を契機に行列のできるパン店となった店で、都市部から離れていても勝負できるパンづくりの経験を積むこととなった。購入した次の日に美味しくなるように調整する技術や、「明太フランス」の技もここで習得された。その後、関西に戻った岡田さんはパン職人として活躍と休職を繰り返す。次の転機は大阪箕面に開店するデニッシュパンづくりの職人として声がかかる。ここでは、パンの品質管理は当然のこと、マーケティングからその展開までを任される。その期待に応え大手百貨店への出店を依頼されるまでの成功をおさめるが、事務所で数時間の仮眠をとりながら働き続ける日々が続いたようだ。「プレッシャーが凄かったです！」。この仕事が一段落するとまたしても休職期間。岡田さんは「また二トの時間が来るんです」と笑いながら語る。

その後、岡田さんは郷里の安土で自分のお店を開くことを計画し場所探しが始まる。なかなか見つからないでいたところ、大阪箕面時代にパン職人として出演したラジオ番組で知り合った不動産関係の人を思い出す。番組では近江八幡、武佐の地元話が話題だった。そのご縁で武佐近くの土地を分けていただくことになった。偶然ではあるが岡田さんの母方の実家は武佐、様々な条件が揃ったところで次の人生へ決断することになる。

二〇二一年十一月、八風街道沿いに建つ小さな倉庫を自らの届く範囲で改装され、次のパンづくり人生が始まった。従業員には近所のパートの方やお母様の姿もある。岡田さんのパンづくり人生に魅了

された若いスタッフもいて、見習いからパン販売へと様々な仕事の可能性に着手しているようだ。今後の展望を聞くと「全て近江八幡の材料でカヌレをつくりたいと思っています！」。滋賀県産の餅小麦や米粉を使用した新たな展開は少しずつ実験が始まっている。

取材に伺ったのは土曜日であるが売り切れる前にお店にたどり着くことができた。販売スペースは二人が入れるくらいの広さで、コロナ禍とあってか次の人は店先で待つことになる。当日も客足が絶える間がなく地域にじわじわ広がっているとわかる。

さて、道標であるが、木村至宏著『近江の道標 歴史街道の証人』によれば、文政四年（一八二二）に建てられた道標には「いせみな口ひの八日市道」と刻まれ、商人の町といえる日野、あるいは八日市さらには東海道水口から伊勢へと通じる重要な道であった、と記されている。

様々なパンづくりの経験を経て武佐にたどり着いた岡田さん、店名を「ブルーランジェ・パンスタンダード」とした思いを聞くと、「皆さんに普通のパンを食べてもらいたい」。ここにしかない新たなパンが仕上がることを期待しつつ、持続可能なものづくりとその道が続いている。と、パンストックと同じデザインのカリウムパンを食べながら考えた。



写真24 クレームパティシエール(クリームパン)



写真22 仕事場にて(岡田英記さん)



写真20 武佐宿に建つ愛宕さん



写真18 武佐の道標(八風街道:八日市方面)



写真23 店頭に並ぶパン



写真21 パンスタンダードの店先



写真19 道標より街道を望む(中山道:京都方面)

四、小野の自転車処

自転車に乗ることが生活の一部になって二年が過ぎた。その目的は移動手段ではなく乗ること自体にある。大きく呼吸をすること、季節の変化を体感するなど、自身を一度空っぽの状態にできるのだ。外からの刺激を受けることで、ふつと自身の中に湧き上がる思いやアイデアが整理されていくように感じるのだが、これは作品をつくる前の状態に似ているのではないかと考えている。北国海道(西近江路)道を北上してJR小野駅と合流する交通の要衝に板壁の一軒家がある。ここが今回の「近江の懐」だ。

板壁に大きく「[Dotershi]」の文字、前の電柱にはロードバイクのアイコンと「どてるし」と記された看板があげられている。扉前にはソフトクリームのオブジェがありなんとも不思議な様相を放っている。ここはお食事処ならぬ「自転車処 どてるし」と称す琵琶湖のそばのスポーツ自転車店、ビワイチサイクリストが立ち寄る憩いの場である。部品交換など相談に快くのつてくださる店主で自転車技師の吉本丈一さんにお話を聞くことができた。

吉本さんの自転車と共に送る人生は通学用自転車に始まり高校、大学とサイクリング部に所属、卒業後は京都の自転車卸し業に勤務、次に名古屋の大手自転車店で技師、営業、販売の経験を積まれた叩き上げの自転車人と言って良いだろう。日本のあちこちを自転車で旅をされてきた経験から独立するなら琵琶湖のそばと決めていたそうだ。そしてビワイチ

コース沿いの小野に二〇一五年一月十五日より「どてるし」操業が始まる。この地を選んだ理由は住宅地近隣にすぐサイクリングができる環境であることや行政が積極的に推進していること、「家の前からコースで信号が少なく、ずっと走り続けることができる場所なんてそうないですよ!」と話されたのは驚きだった。確かにその通りで普段気にも留めずベダルを踏んでいるが、自転車に乗り出して最初に感じた「何で今までやらなかったんやろう!」を思い返した。吉本さんは次にこうも話す。「しかし、サイクリストのご近所さんが意外に少ないんですね!住みやすいからでなんでしょうね!」と、他府県から毎年訪れるリピーターのサイクリストさんとの交流が実は多いようだ。足元の魅力には気付かないもので滋賀に住んで二十年以上になる私自身がその代表である。

さて、操業スタート時は今も一部続くビワイチ救助隊から始まる。対岸の彦根にある五環生活さんと連携してビワイチチャレンジに力尽きたサイクリストのサポートやレンタルバイクの修理、輪行バッグの貸し出しなど様々な体制づくりに取り組んできた。駅近くに店を構えるのもその理由の一つであろう。自転車を組み立て、只々たくさん売りたいだけではない何か新たなニーズを見出していくスタンスは、近世の街道で伊勢参りや本山参りで行き交う人々を相手に様々な工夫で旅のサポートをする商いに通じるように思う。決して自身の儲けだけでなくめぐって社会がアップデートすることを望む「陰徳

「善事」の精神に通ずる。このような個々の見えない積み上げがビワイチ推進につながっている。吉本さんの大手での下積み経験が現在の考え方を作っている。「金額（時間）に見合った仕事をしろ！」と言われ一定のノルマを達成させることが企業経営である。時短、効率を考え一人のお客さんに使う手間や相談も換算されていくのだ。十万円以下で買えるクロスバイクもあれば一〇〇万円を超えるロードバイクもある。しかし、一台の自転車を安全に楽しく乗ってもらうことに変わりはない。自転車に乗ろうとする様々な人と予算や用途など密にコミュニケーションをとることが大切なのだ。「その人にあった自転車を相談しながらじっくり組み上げていくには一人でないとできない」と語る。

大手での仕事癖が仇になることもある。多種の部品発注をしてその互換性研究をするなど、技師として仕事に専念し過ぎて費用対効果を忘れてしまうことも悩みの一つのようなのだ。一人で自転車店を経営することは本当に好きで、自転車のある暮らしに未来を描いていないとできない。

十一月三日は文化の日、滋賀県は二〇二二年よりこの日を「ビワイチの日」とし、「ビワイチ推進条例」を制定した。当日、吉本さんに「どてるし紅葉ライド」に誘っていただいた。朝十時、どてるし前には老若男女十三名が集まっている。皆さんはお店にご縁がある人達だ。近江八幡から夫婦で、奈良からのライド仲間など自転車に乗ることを目的とする集まりである。仕事や研究仲間以外でのコミュニティは



写真29 紅葉と自転車



写真27 店内から琵琶湖が望める



写真25 「自転車処 どてるし」店主で自転車技師の吉本丈一さん



写真30 どてるし店前にて(11月3日)



写真28 どてるし紅葉ライド(還来神社にて)



写真26 どてるし店内(様々なタイプの完成車が並ぶ)

なかなか新鮮なことに気付く。自身が何者かが問題ではなく、自転車に乗ることを楽しめるかが重要だ。コースは小野から途中峠を越え大原へ、東山、山科をぬけ小関越を経て琵琶湖岸へと戻る総距離約六十キロ、獲得標高七六一メートル、紅葉の社寺を観光しながらのライドだ。天気は快晴、先導する吉本さんは全体の様子を伺い、参加者は互いの実力を試す競い合いが若干発生しつつも助け合う心地良いライドであった。お店に戻ると皆さんはソフトクリームを注文している。これは吉本さん拘りの配合ソフトでコーンも選りすぐりのものらしいが、これも採算が怪しい。最後に「どてるし」の名前であるがお店で質問すると答えてくれることになっている。その意味を少し漏らすと「道標」に関係している。「道標」はその場所に鎮座し動かすことのできない存在である。まさか「近江の懐」の原点に帰ってくるとは想像もしなかった。



写真31 成安造形大学生がデザインしたビワイチの日ポスター(11月3日:浜大津にて)

追記

紀要の冒頭は、二〇一九年より続く全世界に拡大したCOVID-19の影響下で生活のスタイルを変えざるを得ない状況におかれながらも、これまでの経験と実績をベースに、スタンスを変え新たな一歩を企て、その一歩を踏み出すクラフトマン、地域の持続に向けて動き出すクリエイター、活動家の現在を取材したものである。

ここで本来の「近江の懐」について振り返ってみたい。それは主に街道宿場町付近など近江の特色ある場にて今日に受け継がれる「技術」や「その精神」に着目することをうたってきた。筆者の着目点として唯一無二の「モノ」あるいは「コト」として最終形として「見える形」に仕上がってきた事象、結果に拘り焦点を絞っているのはこれまで同様、コロナ禍に入って特に感じるのは「モノ」「コト」を仕上げていくプロセス、つまり「トキ」から、それを実行へと企てる「ヒト」の存り様に私自身の関心が高まってきているように感じてきている。前述したが、原料調達、製造、製品管理、営業、販売などこれまで分業化されていた生産構造の仕組みでは「完全なる成功（あるいは完全なる失敗）」という結果しか生み出さないと考える。つまりそれは生産者側によるトライアンドエラーのフィードバックあるいはアップデートを消費者側が把握することはできないと言える。今回取り上げた四地域の六者はそのプロセスを自身でマネージメントし、企てから実行

まで全てを行い、失敗と工夫が続いているのだ。それは当事者にとつての「完全なる成功」は未だ至っていないように考えることもできる。

コロナ禍、戦争、気候変動など様々な問題が直面している。実生活の影響を肌身を感じ、生活必需品の値上げが年間に数回ある事態がおきる現在、以前より増して社会の動向に気を取られ、受身姿勢になつてはいないか自身への問い直しを繰り返す。それは思考停止状態に近いと言っても良いだろう。自ら企て、行動することとトライアンドエラーの感覚を今こそ掴み直し、「ヒト」同士でプロセスを共有する「トキ」に來ているように思う。

「近江の懐」は「企ての現場」であり続けていることを伝えている。

成安造形大学附属近江学研究所
紀要 第12号

発行日 令和5年3月25日

発行 学校法人京都成安学園 成安造形大学

附属近江学研究所

〒520-0248

滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

電話 077-574-2118

発行者 小寄善通

編集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 株式会社北斗プリント社